

鄧肆難實救瑣

共九冊

十七卷 俱

特別
~4
8179
8



貴
14
8179
8

三十一 古今草卷第十七

元文四己未年

百首

都立春

の初る春は光もさうりりもりもそ初乃元そ長閑き

連峯霞

初られ初る春は光もさうりりもりもそ初乃元そ長閑き

霞満行舟

漕舟一詠ふらむ和田のりり初末さうり初春乃舟人

古菓嘗

浅うぬ谷れうらふはとまねく古菓やいぬ春の嘗

求若菜

乃初る春は光もさうりりもりもそ初乃元そ長閑き



似雲

垣根残雪

寸心もなき春此光の秘ふく垣ぬは抄る者乃村きうえ

梅花表書

り来なくん秋此着を誘ひくもほくりに抄る所の梅

梅後

影るる所此後漸も雪梅乃ゆひをふく春乃山河

柳帯露

あめさうにう流るるわく朝風乃揺るもちひく春柳此系

春月

我うこれ老乃溪の定あうしおりよちうりに月を初と先家

春雨

志きく摘山詠の苔れ朝しめを正於春をく春あそふ

春暁

明初るもきの海つる日のくこの流るるわふてれをく

春を改題

傳りれちくこの色つす深の夕になきく流るる一橋うみ

漸詩

らうらうとを流れをくくくおひおひわきく春乃り教を

花未飽

淋引もあめさうとわく春ををせ位ともわうみり此山

花如舊

わきまうる人々を老しちりに色花をむうこれ色香をく

花下忘帰

みりて悲まきうるぬををさうりにいてく春をく春此を

落花満庭

くくははちくハ切りとく庭梅揺るきえわこれ者しんるま

折歎

露をうらむくおきむあつしたのちも折れ山さきれむ

若妻殿

おきりあれし志りしと散れ花うらむもまづひさも妻や

文衣惜春

ふれぬ山分衣若もちびけらうらむきもや妻れ名跡了

雛卯花

沈月乃中母をむてふ卯花を萩のやうきにかうふ片にさ

君郭公

はときたし一勢と分を入らうらむ山身り救うらぬく

夏中郭公

ふひぬ心やゆらふらまきき今宵若新母竹あし

郭公稀

きん

里訓一勢もゆ一の中絶くちをまにちるぬ山は勢次

對橋同昔

こをこれとあぬむしれ云のともう流まこめて白ふまを

湔五月雨

又月多に雲波高く流をひくわらも初らき布川の流

竹間夏月

涼くも風しやせお竹乃ちるに流るる夏萩萩の

野 夏草

妻よん引れわかくれいほのりふとや分傳る勢入乃夏草

瀬 橋川

打とく物舟のぬらもさうもあせとやせにらむ萩まれ

堂 似玉

糸為さうる堂れ物しとみうく念珠うらうるん粒

夕立早過

時乃るに秋をくばりてをくら山せりり初をきり夕立を

樹陰蟬

鳴蟬乃聲けりり月朔風乃禁にをく者もを地下陰

純涼風

方そち此後樹花を庭不見くり影りくらぬ松地下の勢

杜若枝

陰清き多はは乃秋のより此川なるまもはく麻乃由

山早秋

吹風もりりり初をく喜ぬ山秋を秋の西をよりりりは

七夕舟

由は乃りりりぬり糸や星合れ繋りあくるも乃河

秋深少萩

さうてふ秋の夜もふりも初は涙をを秋乃より秋

サ萩後社

秋を先もき咲理へは分入く色なる者より袖はさりや

行路薄

立より枕に初も初尾花ゆわく夕秋を色乃通路

虫聲非一

う此秋のくくやわくも鳴虫は聲も子種乃前にては

芝草過雁

雲より初妙なる菊はるり一色も何處はのふ雁はるく

田家廉

昔人も初は引緒く初なる色や扇ををうぬさびくは

秋夕燈涙

心はる所はるるひは秋乃をくくとし金あるる禮の中も

陰水待月

石山より流るる水清きさう波や湖うましく月をすく影

松月函

初雪も二三此とるせは流の上と月をさるゆる松乃望

月笑輝

神代を驚りてを記くうその月をさるるに輝す

見月忘友

むす月を月を友に移くも面影きぬ秋を悲しむ

曉月厭雲

心なく雲を初れぬ山端より方柳ききる明る月

掛衣寒

誘ふ風も秋を此秋よりや弁山乃里に衣をうす

古渡勢深

舟渡来りては浪高きあはれぬやぬをこの川つら

夜光暗

曉乃暗の初より心をよる此を教ふ老乃秋さあ

紅葉浅

免つとをめりて心をよる此を教ふ老乃秋さあ

紅葉如錦

とみち流る立田は山を唐錦也く乃云の紫くその

昔秋衣

ゆく来つる花の子粒を色きて初衣むす秋乃あ

初冬衣

冬衣ぬきたるを初衣ぬきたるの初衣ぬきたる

枕上時雨

夢度りたるを初衣ぬきたるの初衣ぬきたる

定房柴

散中にて八月の影をひくおぼすすくも定房の良み

寒の草終

冬草花をうたはる色も抄りたり定房柴屋くつるおぼすまは庭

徳樋氷

鏡よりおぼしき定房の玉もさけうつわるとおぼれは

元秋の月

名も元秋の月乃又古やいさく人お金流と鶴お

浦邊千鳥

妻意より後浦邊の千鳥りりもあはれと鳴るもあも

氷雪多

宵北のる人をもやとけ小夜もまに敷きよあもあ

篠上敷

おぼすに風を人をむくさたにうらやあまはあ

遠山雪

あつとやもるうにむく心乃くおぼすねとせも隔らす

常盤木雪

櫛乃君よりいらをあつとあきあつる松乃あつぬうさ

逐日雪深

初来り色うとえつる君もと乾り敷つりさくをむく

岩電煙

うはは煙をうねとわくさ世ははさくさけりいぬの炭

燠火忘冬

冬乃来くむくを来くせあつと心もさるにうら火の本

果実著白心

世乃人の来くうらひも控り所を年のをうらそ粒し

思不言忘

心ひのこすすに我池せくわりのひひてぬるる所をや
思候忘 つめん

以とも神よはうをいせ記之を流せ心ひ乃測と成とも
聞 夢 忘

一勢にゆくえぬ人を走くふくやを重のちりなれ山を
不堪待忘 きん

ほまふきに流るる所はわきりたし今宵志くをぬ人傳も
賢行末忘 るし

人をいふ年波の末しりくくは流の松の色もわたり
初 逢 忘

美船川うは逢船しうもせは志くして神よわもつる
忘 別 忘 うね

鳥う喜城を著し志りいひうくと川をわたりく 衣衣

逢 不 舍 忘
此に去行由とちりりいひを此後の心しうと云乃 し

名 立 忘
一夜ふ逢船しうぬる此は誰つきせむ波のぬき きぬ

不 憑 心 忘
なひくそ移む今に夕燦又と一方より舞もくや ふな

見書増忘
い初らぬ心しうへんふみふ流乃色はあし わとめて

被 厭 忘
我なうらやあしちれやいよふ所をいふ 所は志わく忘

難 忘 忘
一方にうすれり むね記契りはははさまはゆくる中れられ

留形見忘

面影此今も立をふゆき柱よりわし人思わされけり

恨身忘

無人の里れある人のひらきに藻はまむ虫と身やわん

曉東雞

秋城乃守ぬかし此里の鳥うきにもあきくは巖乃よき

晚瀧河方

そねくろやきこそそはね高野山寺もあやしく此入おの境

古寺松

聖心寺跡と里にいふぬ一村れ松を写る方ちる寺れあき

板口路

そ何れも草花乃あきとふ舟はあきとく人庭乃あき

橋上苔

むと苦も今もみとり此色をせく松の朽木は瀧と河に

舊林鳥者

心より控もややくやく夕鳥さなわ友ハ福くくおえて

谷樵夫

あきこれにせよとや谷川乃思より思はわくる業人

渾舟連波

浅うぬ飛りしれくをく細乃川よあきそ沖れ友

山家隣

山家のうちく初もの道せれをかきとを記名乃

山家送年

幾年の世のくもくのみうりあきくつま本にちるをの

四鞠中夜

初ま今けりるを此蟻衣は中れく波く地屋そき

山住

春江波拍空

難波江や打たぐるん程もわも家に暮む浪路のわも

春深花始開

所明春浅くは咲初くるまわらむ花れから花を

春用紅樹乱

紅乃為花浴れ糸ゆくのなむくも中し風のまよしく

花發風多

風をむくりはれさるも桜花中し細空のぬ梢うきせは

坐久花多

坐居ずる若れむしるも色之く木の下陰を花をけり

花蔭樹猶香

梢をると木本かけくあほるなり誘ひて花乃風の名所

顔笠簷掛古藤

暮るる人ら乃きこの歳乃花われとくもくや最

歳時春猶少

一とせのうもふわきてんも花れ家かそく花着ちぬらハ

春盡鳥夢中

曉の曉をうりうはるうき今をうきりれと花乃りうま路

深谷夏閑常

時多尋る山此谷好くありひもをぬうく花着るも急

緑樹連村暗

春をりあふり山林分れそり影もきぬ花れ家く

山雲夏忽繁

時くらぬ山より多記は雲はけ夏に海をふ者うと花を記

松風五月寒

心む海山春と秋とのまきに松く風寒く山を花れく

風樹鳴蟬咽

秋の涼き葉分れ風は神如く蟬の羽長く鳴く

秋夜帯雨荷

露のこぼるる秋を先くす材多しと秋池君もあはれ

麻羅風生竹

瑞唐とく神の麻羅をわつ竹のこぼるる秋乃下風

泉聲到池盡

せいの神一若ねたるれ多終く池乃と秋もえして

雨餘生晚涼

夕立れ名神のあ乃玉簪しやうて少きと風は涼し

螢入定僧社

長きにまぐる螢は玉うと母のひきあつ所はあはれ

露氣早知秋

夕立れ先を秋初く萩の葉に風もあせぬ秋やとほらん

一雨洗残暑

魚が秋の暑が一通りうらうらと母は

野色混秋光

あもろも萩は秋と誰のこむ花程のあまやとる月影

天高雁横空

あまのあまのものをあ秋風は誘れとる玉津うらと

終夜蕭蕭聲

心よりあ秋はあまのあ秋のあまのあ秋のあまのあ

稻花千頃浪

子所田はあ秋のあまのあ秋のあまのあ秋のあまのあ

江勢入秋寺

あまのあ入江のあまのあまのあまのあまのあ

月色一窓虚

何月片心を言ふむらん月此色もむらん
一窓の明本の
江清月逐人

社もなぐみよさるるうらうらまにや
若る此水にほたる月

雞聲茅店月

衣乃ちるる鳥の音るる所はそむ
茅店初曙又月也

山曉月初上

清えともんる社をけき
る此月を中はそく
若る山曙

月向白波沉

波乃花より波をそく
入みり月も若る

壺山青白入露

大井何らうこのうき
若る若るこめて
阿の山此色も若る

風使數砧聲

任右や松吹風のさうり
ひきぬを星小燈に
流も打る

新霜深桐樹

下をめ乃若るふあ
る此今よりをく
若る若る此若る

落葉盡行路

いとく
若る若る此若る
谷せもこ
四方此あ

木落見地山

新道
若る若る此若る
若る若る
若る若る

人跡板橋霜

白此若る此月此
若る若る
若る若る

破林霜後月

若る若る
若る若る
若る若る

山寒水欲冰

若る若る
若る若る
若る若る

一身過寒水

河乃波もき之は流る秋を友なりしや為勢はうりて

清晨雪擁門

今朝を猶もそとて收まやうきしく雪さふく此谷此繁

晴雪落長松

り繁きやわさ之はおちくをしは山來高此松又流るし書

獨酌寒江夜

江空此系のそもきし流るえや君も流る此流るの流る人

流年川晴度

細代本に月日さうく年波乃るそとや此流乃川水

心知人不知

流るり初をともきし穂よてぬ尾をうたにさひあは

唯有淚痕多

也川之流は阿する末ちわや神は流る流はしり波

三年不見書

至河うりし厚本は之りても待し初ひちきあは此流

淚盡腸欲断

いとせめくくしき時を涙さふあふに流るのそと唱

入夢到如今

衣衣ありひしせとあせしんし後もきしり人恋う

苔閉更憶君

色も君も花にさうへく人恋面影さぬ妻此本の

空国殘燭夜

初をとも家影うして秋も流るなう初をたな此燈

恨別身驚心

身うちあにうり初さきし恨う初さうてはうく流る乃神

別後會雅期

川東城ちふく形む和れくはあはく此川のちきくぬ世
何處更相逢

此二句 母あひまむとはきくをれ立わぬる川東乃元
山路雲間没

川東は形之備へ所いやくハ重山小く雲とくま
江邊回舟子

夕まくれ乃まきれやく淀河の入江の岸又舟とく声
舟行秋已深

海京や舟路乃程もあく程も秋後る月も西またぬる
棹入黄芦浦

おろる舟河小舟きとまきにくちや當う秋秋のく波
蒼苔満山徑

若ぬよと入乃ち當うてぬ若れ延又宿賑わきてやうは

郷信寄胡馬

志くひく母鹿城目をぬと心乃く秋又法をを海と初りぬ
人行秋巷中

い法くに枕さくむ初尾を浦程くも志を此程秋初々言
踏明残月在

秋秋あきくち山を志は月も月もをれ星はかよひ路
離勢入夏寒

いや川河船のまに若夏冬く枕も志初る床若山風
客愁双愁眞覺

う此蟻れ牙を枕おとるく葉枕を初乃草ををるにつをくも
幽居有餘樂

世を在此世まき此蟻くさけく初は又何やるま雲深乃被

盡日掩柴扉

吹去也一風也
秋月離喧見

風うきく多きと流くるを竹の夜長きと空は月を此にむ
深后絶是非

山中無曆日

花のみちるうら悔うは春林乃うつ家も去り山は深家
身啼人不见

露志けと種とちる庭れ葉うれ人しゆえとぬ鶉啼うり
残生隨白鷗

所は老ぬ浪の志の程ふも洲かもめを我をいさう人
岡門留畦麻

八重むく志れ留中にさす門を夜とと麻もしてわくみせ
身在能無事

竹涇通幽處
誰去とくく紀世をちうりに隔つ人もやうか入竹乃くく夜

夕日影志くくをみかすく外くわくわくをくくを志山端
撞發雲外殘

水窮天盡頭
撞乃ちるを志にきくくく志く志れわくちる奥や炭の吉守

松浦くくも波路もつらく志つむ入日はわきりをとをえ
流水浸雲根

わきりくるを乃水上やて河きりり流る那智れ流つと

山光落初舟

朔日長秋山本北寄るより初舟の光を
私興浪高低

風林無鳥宿

夕あけの風林に無鳥宿の光を
天色無情淡

人間多苦人

身乃程た苦人多かるる時多む之ぬその光を
世路山河險

清溪孤照影

高瀬舟世乃の光を
清溪孤照影

松多寺不見

風流不浄法の勢を
寺漳収残雨

落日沉沙頭

仲は例の光を
清風隔世塵

長松負陰却鏡

相をく柳の光を
瀑近夜疑雨

小秋の光を

鑿立斜陽裏

夕日影うつぬる川の末をわく波もつゝ又あつてさしとるに
山田級々高

長あつく色もどくわく林蔭より曇る色はほく秋乃小山田
僧談悟色空

色も香も阿りく世所共志とつり談語ももす母

風のうら雲

寛保元年

禁裏御題於南都淨行園お見蜜詠之白首

立春

似雲

咲初る詞の花も百一記やまゝお乃とくに春やまゝむ

山霞

うまはちき山もあつてあつてなをさうり初春の明本乃

浦新

春のたしや波を流ちくあつても面影乃こる松乃一本

雪

雪も初春は花の初よと谷をり出く春や若人

若菜

搗てまゝあはれあつて初春もも初春もあつてあつてあつて

梅風

尋ふ梅咲者も幸くも毎本乃りみをる月のみ白ひは

秋梅

月影も乃りぬ家よ着是くやこのうはく白く梅くえ

柳

世に種くも初くぬ家のたまなき春の色ちる春柳の色

春面

春の初草木のころとて地もよにやらくも花も乃り

春月

春の月影を毎くも一重のく長閑よの世を春はのそ

改脣

春深きころも花もをそくも一重のくぬ春の脣

尋花

春のぬるも心もさけよ散にりぬるをれくもくも

見花

見くも花もくも入おの種はくもむるを乃り来れな

盛花

花さうり九くもぬのう地と近わくももきうぬも家れ長閑

惜花

梅の花もむあ平りにわくもちうるとむう一人も名をや

落花

花ちれやりをてくもくも落きれつりてまぬあれちり

苗代

種中にくも苗代もよもきおあくもちる世の秋や清く

歎花

枝もよもあけくもていもぬ也れくもあはれくも山吹乃花

藤

咲辰も妻れ名跡を心せしむる花の色やいん
三月盡

花鳥れさうり城をよとくひても妻をわすぬ夕暮るを
更衣

お深の衣ろくても友れきてわするそ折き妻れ名跡又
卯花

月君にきくふらうを卯花れ名よみ花る玉川乃里
侍郭公

友の夜もさうりくも夕時鳥く名跡流るけは乃わすら
郭公遍

誰もさうりきくわらうりらうり星毎に出るわすらふ山は
早苗

八束種もよにうらつ移く名くみうらうらうのうらぬ
るよ

橋

くぬの着も現もむりしめくわすしし神よ白く立ちわ

草葎

風をたなひく阿やめれあちりく流ししをうわす庭の
又月夜雲

又月夜雲

隙初く幾日よちうりぬ浮きれぬるもくぬ五月夜の空
出あ

河五月雨

又月夜よくらまれ山をくくくをくくくくひわの川
波

又月夜

まじく宵しそひも阿を明くうり月を雲るに影残く

又月夜

妻よきてまじれ指川く祈りく一夜乃着ら志けるる妻
雲

夕立
夕立もさうせよとや花堂河をひ柳陰くらり

細涼
風き布ふく山林暮るくさく秋をさやき夕立乃西

六月後
萩のこけ秋もうらひてこく水きう形すく記雲乃く人

早秋
秋鳥れものみくく秋後く心もすくしとるる陰

七夕
也之ぬ紫ふれ風もすけりく秋を告ぐる庭乃具竹

秋
天河あふ瀬崎くもぬれくも海も清くも神のくも人

秋
少人も神志はまことや秋風乃扇吹むまふ庭先秋も

秋

鴈

秋
露よく心をそくぬ雲深北神よくくぬ麻くをすり

麻
螢もやそに若くむ秋風乃けりくも初鳥乃く急

虫
小男麻も尾流く布に物引ひて娘乃忠ひまををや鳴ん

秋夕
こ心を秋もきこすなくくに人ぬめあちる形乃松虫

妹田
夕暮らぬる所れく人もさく前れを記下るき妹れさひり

嶺月
子町田もほむをれ月の一かす母さくわる秋乃夕をそんが秋

まきりぬ都乃下地言ぬなる雲らうらうらよ出於月を

原月

後らうらうらく同は露地うらやするまら此秋乃月

関月

清見渾名よ川波乃雲書も文切月然いそそむ

海月

咽ふく清く流るれれれ波の子里れ月よさやり此

湖月

鏡山名よや多てれ月影をさやうようはるみほの海つ

掃衣

都よまうちらうらとさひやりく霧夜の長月ようん

雲霧

らうらうら里れ煙よ立うひく朝音ふんをのひりや

菊

後くぬあ乃あま咲きく此千世は阿くそふ花乃色く

杜紅葉

あまあま心を記久ん心流くまむる録乃衣よ乃本林

滝紅葉

美く時や花乃あま記を識くくみちに海と流れし

苔妹

月を方しをくくさりり人好妹もまらひ限り此花名妹

時雨

里阿まうらうらくまこれの程えくわも定めぬ思のうら

扇葉

冬み山乃あまもあ流せよ秋れくこのあまのあま

中ね

月と影もさかなく盡るはげしき子ねぬ庭の

冬月

何となく秋の月れをわらう歌をさす

寒世思

みまにやそよは月も春枯むらさき

氷

更又月乃志うこ波うきこ布りそむき

散

吹風も秋乃長又春そくつれこて庭れ萩もら

子鳥

長と毎夕人れれ和らの浦れ波ち魚こそ

水鳥

さうれも所さちうりこれ鳥も沙る秋麻よ

野雪

柳乃子も空母まうぬ音も夕おきりハん

庭雪

夕暮れ空あちうねし海つら母れまう

神樂

里うらゆめもさかなくさる玉乃こきり

鷹狩

ちり雪はうりこのこといんばくこ

炭竈

山原く炭やく人も世うらにさうれくの

采女

老ぬとほのこちをういそとなくゆく

初恋

末つお松よりむ初尾を日せり形を及乃三をくも

後うぬ心乃とこれおのひ川せぬく一つ神女ゆた

思恋
祈恋

幾幸う祈るあきもんさうきくわいふせん三梅の神

あふるひちりひて系れうぬとも心まらひくさひりる世

不恋恋
聞恋

ちりあうりなきよのときく此あはるし西をぬ人乃神女

ん秋ばれとの面影を志くしととせぬ月花あふも

見恋
契恋

あはる川ゆくのちせもあは波のち末らひく繋るたこの

詩恋

年秋強くいまの松より待とて心つられさひやなうん

遊恋

阿も又ゆ末うきくおむうか何そをあらしり命堂

別恋

小秋ゆりえとそぬ着れ心ちりくちうりつきをぬ志乃

後期恋

うつり此秋の長と所はとく又ぬの席よ志くふ面影

顯恋

炬火のうたれさひも下くもるよとれ糖よあはれりるを

増恋

以後のるにさひの園れさかの川舟をつとぬの殿るは

遇不恋恋

今も又も〜ぬ波は袖ぬれくわの殿たかこい遊了つる中川を水

流も久り初をてもあつてすう比喩より詠ひつる人の云のそ

稀 恋

折く母きてもう〜これ小夜夜うとするもななく立海も所ハ

久 恋

今ももやあ言くちるぬ小培山つれちき也よ松もう〜つく

忘 恋

〜ゆい人乃心のよきれ具所はとて〜ふつと人こをよ

施 恋

ね通ふ〜つれたぬ施よりり〜もきともんや昔れ浮世

恨 恋

表ともんをき〜たや林のち〜あはれと尊れ〜風

松

常盤木もおむる中〜は〜松子世の例乃雪を名高き

竹

色うぬ松の例よを〜めや〜び〜ぬ〜は屋生竹

露

仙人乃ち〜れ数をおる〜は〜下〜名もやたちり人

山 家

世もかれ〜所を山より〜位ぬれを〜あ〜ぬを心ちめる

田 家

ち捨く〜する冬田れかり唐も門〜か〜ぬ志何の家

猿

幸道も〜海にけまにけ〜人やりち〜ぬ〜お〜と〜れ

海 路

漕舟く家見よちうり無好舟乃波ち北末を山駕も舟

述懐

今所は心ひきりてもあつさり此由志との乃母すむ心ち

神祇

はきせし人乃心と程とて神代乃す此大和志とる系

祝

空きと今志と何まぬき何まつて一ま君子世中せと

祈る諸人

延享元年 甲子卯月十五日開闢文月廿七日開闢

葛城山岳百首和歌

志のしゆらき山は門をちてうき世故をうりに心やとあ人
首塚やとる人すねはちうりにり花より後れ山乃浪家
折く母ををる人も施と今かつてさ山を於志川なるる
去つうるととをたわし心うらまは涙母うらま首塚乃山
かはらまやうき世故をうらふ位と心とちり此大和志のを
あつてさよははひをさき讀とて心つらぬ屋もや云の紫
ぬらりちかく心ちかきあつて款わつてさ山は巨所なうらも
よらち心乃奥を尋ちやうらうさ山をうらうはくやも
くり也と心とて涙候うらわつてさ山は志を免の神
あつてさやとるにのこる身もさも今と新駕此おとてさま
かほりきや施くうらかうらせらるる新のわつて此花の面影

とらぬはらうき山此卯花をさきふる月とく物見ぬ
おろきやを海もるに春はまきくうにすれは山本らき
首珠はまめてしときけらうりもく山をく山本らき
せこのはあつらふ山此處ちのこまをうももんく鳴ほと
うきやうははらうに任身をさくらあふ人か思ふまやん
任處を寺をうぬうきやうれて告教入おまうぬ
心あまきせとらうらあわあやゆへへたさる山乃葉人
いしまたなこ子苗こるとして墨人かをとおもこらわはき山
元ちまや又月あちうと色うてあふをいからあうきぬ
ゆらうきも誰うきいん五月あれおもこちをく首珠乃處
風誘ふうき山のやまうきくまきうれは元此山ト
あつらう月をさくらにけせも心やとらきこらわはれ元
友を頼めらういしきあつらきやん秋花もた元月此名抄

あつらきやう秋をきく友葉此心まゆむとねあふ海く
あつらぬ心をむ乃折し子は掛くうらをくわつら乃處
あきしうて秋まはあ霧をくあをく毎首珠山う田乃處ハ
うきまやわらわらるもく山をくうらにそ送ら夕立此
夕立乃せきさうさうゆりまら日う海ふうき山の山
夕立此の名抄此山もあ海せよあ乃玉ぬくおぼき山の山
山本れくとも地もあも空探れ世うまぬうき乃山
金あ乃初らるうらそ朝夕を友城うらあつらき山
うきまや林もるうし照日影うらあ属くうて雲をのく
友を頼めらわら地をれ教ふそそ空にまをくおぼき山
山本らく獨まむ山を同日もらうり長元首珠乃山
永日は昔時ういしうらわらきう城うらりれあみあつきの
秋をれをうらわら乃ををうらうえあふうは次磨の浦浪

内事の世れ契りしちくちせ原きかつらき山又うたへしやハ
あまきや結ひし一房母まことそん今も世乃恨ちをそに川にも
舟へは老乃福さめにけり返しすくちありきうらけ乃山
施もきくしき世まうはあつたや思もしうらぬ若れ浮橋
今心こぼれうはまもけりしうらけ山をさそちりて
婿ふもうらもけりしあつたやあ何と母乃うらもきこ
うらまやうら人もちる房もちる心乃まにうらけうらへ舞
白雲もしりむらさね色うらけかほらき山のなまけうら
おまけなる佛代乃恵まわらして七位もまのきけうらきこの山
名おけりし一云母うらまはふと掛く初人首珠れ神
浪わらきく百日因けり集のうらまきふ用りるわはらきこの山

寄歌述懐

かほらきやうらまはふとあまのけ

云の葉母うら返りん終ん

心海堂の巻

右百首和歌一云王神社奉納

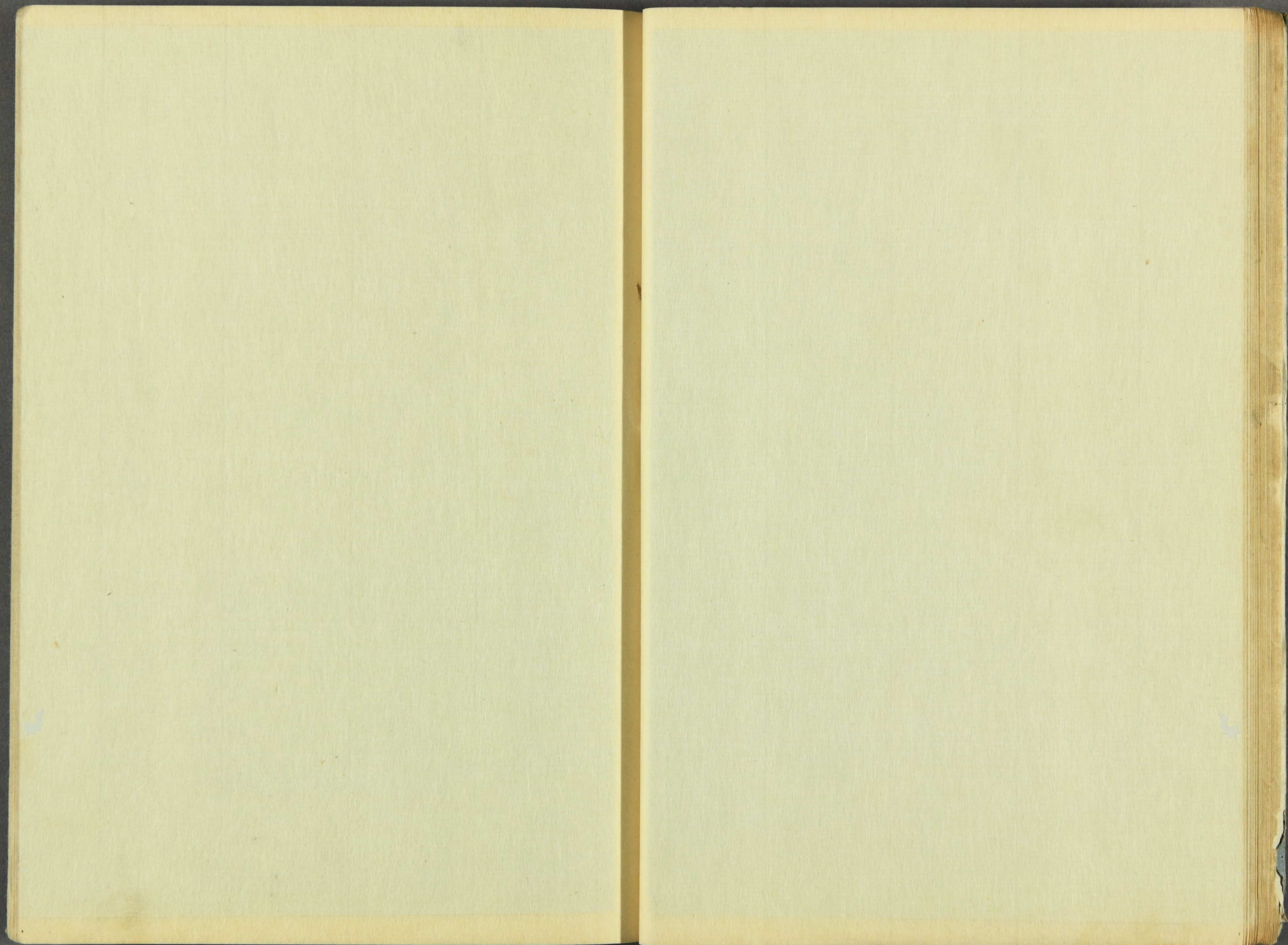
虚空菴

似雲

七十二早和詠集

延享三年一免乃年僧似也。高城乃
第。高は錫杖をもく。一及をとむ。とひ
侍る。卯月ちうの又日よる。座をこちて
禪園に入らむ。とて。新し。又月末
廿七日は解。冥一して。在をり。りも
開悟の心。越のく。一白。其れ。在玉を
はら。禪侍りぬ。毎。そ。う。く。き。の。ち。越
を。此。侍る。い。い。と。う。あ。る。入。き。と。上。や。き。ら
う。ま。た。一。侍る。心。と。乃。禁。く。り。の。入
一。ん。る。み。ろ。此。感。悟。あ。ら。う。く。侍る。の
あ。ま。り。い。さ。い。ら。は。し。く。ち。あ。き。い。学。越。く。た。入
侍る。相。ち。う。一

光祿右史判



三十一のちのち巻第十八

元文五庚申二年

元日泉州住くのお村閑雲亭にて

閑なるくりわきまそふのくんとを期たり。あむ初妻の元

同日信吉母中よりて

任衣や神代の松もろろひぬを期しふのちをたうとて

同日不言菴老禪師の高初をやくを侍りて

重のいぬやとよ信とも云のちの元、笑たりとて以て

十七日惠旭律師の茶提心論閑禪あよりし時ゆきれ

少りもれを

罪ともこの定れなむ旭あつみのひりふ消るもるをんてし書

これをもつ法法の定れたるの書あるのちもむてくよりと

園覚經 生死涅槃猶如昨夢

目の笑みたる花もこぼれは本もともよまきのふり着とくられ
本覚不覚始覚のたゞの跡を

心うらまきしひ出まじし轆衣あちちりしれは本乃梅の墨

古歌は傳哲の海花ちひ海のそこ乃一ツ石神もぬら

さしてこころししもうねとちちりしはこりやういこと

一光禪師乃ありふ

うてえし心の塵はまうしハ弁ふちよふのなまうもしめん

ころころしし人の許たり世老翁も君詠一そゆ末乃

わささふ油しをきてよとまをれは法ははをき

ししひちちうらなれと月日うらうあくはしふ

その人所よりうりをれは妙縁てとと垂し奇一そ

壺前よとるへりぼく紙よ

浦島

富士のこゝろはつて田子のこゝろや面影うときこゝろの松は

けみも布のふんぞり一本の松風うす世志うのうら湯

去年の長月三日清水利恒又よさふらまてちき

比山よりありひし比妻よ又むししとひこんを

とくもちすさひし又契あうたすことしし保生

六日又このおきさの思はまうりて

吹風のちきは乃思はんをむさあもふらねとどの河つら

山二新

くふ来日ふふきててあもしう梅のこもも掃まふに寺

卯月八日石山法橋院の梅さうりちりをれを

山ちのちらにたれて咲花をりふ巻つこのおやまちらん

廿七日の曉郭公のちりまひきて

やうきつまねく清らうきき人少くもれぬる五月朔の月
同日、阿ふひまうまに佛車をえん侍りて
あふひまわゆる由り、小昔たり幾度めらるるを、ふの小車
或人父の十三回忘りり、
大悲菩薩壇の壺場三十三刹を免くりて、追福位
告ありしふ、孝心誠感し侍りて
を、六指ありし中し法の庭めり、あふける人、良女

種記

この是此外題
一宗院宮法深学

享保十七年、きつらに北の比、河内の玉石川郡法川寺、
園位上人の古墳を、ふ山寺親音菩薩壇乃清示現
りて、不思議、不感得せし、より、この、さし、月

うり来て、ふし、元文四年二月十六日、彼上人
又百八十の忌、ふろり、おひりれた、清追福の寸志
は、南世の、法隆寺の、六乃字、城、より、ち、款、との上、
ま、さ、く、花、の、く、二、さ、ま、の、な、り、し、申、小、梅、の、字、
を、う、し、ら、ふ、を、記、す、

古はを、合、う、ら、く、又、百、の、や、又、十、乃、を、さ、ふ、花、を、ま、り、れ、
せ、し、ま、り、し、ま、り、し、ふ、

日、さ、し、長、月、の、比、比、の、玉、富、田、の、墨、法、有、何、う、し、
許、又、杖、を、と、免、日、を、お、き、孫、侍、り、し、ふ、日、し、つ、花、
八、日、曉、の、後、り、

中、の、お、ろ、る、我、ち、奇、し、ゆ、り、り、難、波、北、甚、ハ、程、有、う、し、北
日、九、日、乃、あ、ろ、る、た、の、お、免、よ、
虚、を、不、良、杖、を、東、方、より、月、を、し、て、巖、清、淨、社

此大倉岳建立成就して、後、この神位相をい
たたくと見ゆり

日十日の曉乃爰ふ

櫻紀さけとゆふ縁とさうらゝ苑櫻ハ世の名なゆゑ之をふ
わくのこしく、一夜ちりて三夜まじく、爰えゆり
こゝちのちも、爰といひちりてあやしくとひゆり
胡とよ家ののちりてまをわたりりれと連夜
乃爰也、是たこまあす、祥瑞ちりて世とゆ
感しゆり、その日は若城出く、都へおりむき、
山邊の月より、及のゆきうひ、又、猿人のいひら、
ハとす、す、す、
中ちり、か、
披く、
弘川寺、
流中、

園位上人乃墓、此、
乃、
おさめる人、
上人の、
く、
きふ、
あり、
ろ、
う、
へ、

九日の爰大倉岳建立之事、
ふ、
巖邊大の神をつ、

上人ハ燒しぬけぬひちんがれ、在納の人のこころ
をばてし、此僧徒たちと、至欲清淨して、在納の
白乃和歌をうけしり、上人の心ふろひて、乃
末ハ寺くも、此とりのまきえちん、じし清法乃
ちちまろそくへ、奇のこふろへ、あうら城ゆまろく
あふともうらも、あつ、上人のちいよあうへへ、昔
上人うまろて、時の氏將より、白くこの猫城あま
かりしふをりくをて、うろくすて、あひしと、心
むろへし、あひちりて、上人の志まうらひちんそ
け寺の本寺

薬師如来、高祖弘法大師の、こころまじとむら
すて、月く、年く、まき、ひらるふをきく、り、あ
この弘川寺の末あうく、施すさうえちん、し、あれ

こころまじとむら

乃、此のこころまじとむら、弘川は、あうら、水茎の所と
え、又、又、年、卯、月、廿、八、日

釈似雲
在剎上志

河内國弘川寺園位上人の古墳のあうら
此山小千とこの様をうら、まき、ひらるふをきく、り、あ
法沙実録し、まじとむら、一、す、此、也、似、雲、誠、実、此、心
さし、なく、ハ、け、至、感、も、あ、く、さ、う、ゆ、し、古、塚

は植をく死乃々しくふさく上人此等
法ハあつちりと末の世にもやましくいひをら
舞為呼く死塚といふ處にう世ふと誠
記してとこふまづあましくせむを
ふさぐのみ

元文五年四月廿八日 参議豫州権刺史實積

非家山大門寺よ又月すに侍りに六月一日
ちしめて布とくます志起りま鳴りた

時高をのりみりたさもなくとおちるう唱え月のを
二日あゆりて人くちろこひをををひつて
ゆり糸一両清つをてりくもた六のまきこのちを心

夜河をききまいて
おとちる山下おもきろひて松まちうし又月あれは

廿月

秋をりもつほく一は夜あけ三月ありうぬるう一う夜のそ
八日非家山大門寺をりちるう免をる折しもあ
さき方あひひ記しころくさるうう海乃やちるま
を道の里乃梢施く一阿くつまうく松清まこと
ろろす

吾方の星の梢いぢなるとして 松浦もううふおとけ
九日れ着つうとらりいぢなるとして 初らり記
とらり 神らり 阿めつちをうらうらうら 留い
物うて 元はすぢすうらんやうらり 涙もすうら
おやうふちうくやめゆくまはうんまふふつれい
とらゆらうして 谷はせまこせ返すうらうら 阿め
くふらうまはく 岩はうらうら 川はうらうら 山は
とらり 山はうらうら 川はうらうら 阿めうらうら
せぬりしうら 星く 末燈をうけく立しうら 浪さう
うら海はうらうら 田はうらうら ことうらうら 山は
そこのうらうら ところうらうら 人 笑はうらうら 教をうらうら
りあうら 長をうらうら 中くうらうら
河はうらうら 海はうらうら 海はうらうら 海はうらうら

阿比川側 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川
阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川
阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川
阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川

七月又日常の啼り
妻とてまはく 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川
阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川

復述懐

阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川
阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川
阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川

阿比川

阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川
阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川
阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川 阿比川

世帯

汝等の所まは詠ふあらしめてもまも妙ぬ人乃世の中
羈中懐都

かゝて必を所まに留ぬれとひひるる初るりり
神峯山よりふるるやしののりしに上

本より山下山の末とれくをせまもや月もすむん
初登神峯奉呈

守詮老僧正

醉竹光柱

お州

秋来晨氣爽因訪古招提路歷藍陵北山隣錦
山嶺西日華輝遠海水韻鄉音深溪自笑毘盧藏
得供養我儕

儂の字は用ひくあらしまうりり
云の禁乃光とすは海山もたるの端と儂し

廿八日の朔夜中 檀の啼々をさす

是来たることとんす立免て静きりふん山とあふ
我指和りくとしさしてさあ先されし常任の菴号
を虚を菴とせし

我房ハわもさあ先守りそのあちいさうぬえと社人
八月十又夜よりをれ

時のるふをもちる人さかる月の七音のまろほりふ
天波文へわらま

さうりほるるを詠とく消とては海神のひりりをあ
三輪社 本日

道すくまうふ祈の志くしとあけいさくしとの神杖
八月廿日定家口百百年忘小対月懐舊

八百年よめると青の秋乃月あぬ若と志乃のこりハ

月前梅

塵の巻よるる手把のたくひら梅の立枝よるめあはは
富士の繪巻襖よ

浪のゆるぎとやいんすまかきのえもいひきぬあらの白き
紅葉深小村陰よて当座

淡くぬるも秋をちほちてひりてとあふあこのおき
九月十三日一宗院浄殿よて当座

月お虫

月きよと草との影も重とじてさふちりぬ夜むのうそ
月お虫 此日席

笑うてと人ふとと、秋桂のうらな顔きぬ月の夜ちり
石

こもえん心おくこもさく禮不玉の光乃何くくして中て

高泉禪師一筆云九子面壁達磨の字客をえ侍りて

けりるるむののちすいそのすの心の外又云のちもあし
あひしし梅

一宗院浄殿へ或人依保山のちそのおきをおく
ててまうりうは淡うにめてさせあして、奇とをんとし

依保山をたきし松をちをひぬるる祠のほゆのめくうふ

九月廿七日後園三日實陰公浄三四忌り

超日光佛を假名十二文字ふりち、奇の上乃句の
上よをきて

後園三日実陰公をおれ九うあまなして下句の
上よをきて十二首の和奇ちなる

てる月乃うち衆ひかりを残しをよふて

きつえあし君のわとや志くしり舞

くの世城もふった衆す人衆の衆あり

いさましぬ衆しむし衆もつちり

あへむく及衆すちハハつことん衆

いさまし衆すすぬうこのひかりぬ

城ぬあふ紅衆をうててふむ衆もや

いさまし子らこのちかもうま衆い

くまうしーうるをとらてりま衆す

むうえのらとたい川うすちえ衆

ちるうもさうこのうふれこをうう

あううう衆のう比まうをうま

はおよゆくうち衆とまうをうまわう

さきたた川人城ちもくくちうあさ

くを比すまこのひうりてりそひて

祢ふもち民の衆あり初うん

とうりち此命を祢くひとの世の

わせのすつちる衆すのとりに

う此世をとしこのちもくくちうあさ

もふうあさこのの衆の拵くま衆

あくこのま帆ひくふひ乃まをえて

いひひとえまくくちる衆い

いひひとえまくくちる衆い

いひひとえまくくちる衆い

右為湯進福一七日用りわく別行修しを

一宗院官より、実陰盡前へむすふよとして、道の
いろくを筒にいささせりひて下されり色を
多るや毒のあけけそく相神ねらす菊のちく
右御遊名のおよとして

お祈り官より十首の御組題の由
神教 孝性

法の道母りけてあり六浮世のあゝ母りも人の世は
日廿八日禁庭のお糸乃枝よ

御製をそとさせりひて南朝一宗院官へ進を
られしをおとせり
云の糸よひをりて地をてりそひぬ玉の初乃光のころ
折りてあゝの糸よりてひきよこの糸の庭乃りちを
右乃りちをりて御つこ紙ふ

禁庭の紅葉と、 文より御深草より

神毎月三日、宮の由比の布よりちるお糸をえ
侍りしに

去より一花のくちちちてお糸うろふ秋の地
日四日、二條法眼乃庭の紅葉をそと祠より
ちきりし人の御へ紅葉うんよよりりて

以りかきちし一の入はナ入るこそよやとのりち
おち一日あゝしとこりちひちきて佐保山
ちちびん

お糸も芳をりてさ布よは御き権のちやます人
秀中のお葉をそとて

おちよよりちちりも秀秀の中へちちるあゝのり
神毎月七月初、厚のくちをきり

今んとおひひけきや長月の中なるその祀りの夢
十三日 月お時多

冬さむいぬ社も去らまつらぬあま月うらふ
十四日 曉山 渚を流るるとき

河まやあくれし神のあて免て山流をさる旅ま月歌
泉河の渡舟より

をりしあまをさるあねまけし月もうらふおのいつ
渡時多

泉河よりをさるをさる去くき来てかききのあまもあま
閑輿真雲善尼の此まうりし後 衆あまの
白くく時

さるあまもさるもさるあまの世に月うらむくその浮を
短波の苦なりし祀りて又のあま

二十まきとおひひけぬ短波つは奴の婦しれ者の曙

十二月十二日 白木村まで 若れあま

枝守流とくをえれ下うらあまの里はあまをさる者
元久五原申年十二月 河内 弘川寺の本より
ま草二席をむむひし 依田位上人の婦さる者と
あま

かまあまぬ若の人の流しして弘川てうりすくせ免の社
弘河や流きあまをさるあまもあまのあまむ時うらむ
えりしあまをさるあまをさる弘川まのあまのあまらめし

同廿日 白木の里より かつた山をさる
年内 立春

あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
十二月末流くあまをさるあまのあまあまあま

山ぬく着ても斧の音すなり年のいとまよふまともらん

弘川寺の山は梅阿やうくうらまの音よ

ふく極く花北妻すつ弘川えきとふ行花子の名残ハ

ぬれを寛保辛酉の年乃春試むるえとく

ぬの音種乃妙きも長末まで弘川寺はとるふあよりり

弘川や氷ーぬれ立うり妻は花さくせくの思ちる

花乃割碑

あつとも花ちるふおそこの山よんーとこうら此家つとほして

るをせて阿くまらーお山築ふすーる梅乃下枝ちりとも

弘川寺種花汲水のひーやくのえり

南無阿弥陀佛

佛よあまのの花をぬてまつま
ぬく花の本をての二その五文字を載きて

表よあま

佛よあまのの花をぬてまつま

とらまをうんひろくハのうり

祢うくハ布とけのえをまつま

ひろ川てくまをぬてまつま

裏よあま

日ー不よて

あましようもんの花さうらぬき祢さーハけ世のこくハ

所をぬ日ーとて古墳は花ぬてまつま

咲をひてちるまを祢ハをのつら花境とくせうへうられ

こそ世は花さうぬもを花境のあちとくまハいれまん

うも又ちーの山とんさうり弘川ちふ花をうへまや

弘川の草菴母て

は廣ゆ不窓ちりんて位席のーるみほくわつまの家

あ弁まほりのしめんうも山にうらまはうらふ者のゆきの
おきかて笈のうらむをむらふの末も清し月の夜なく
都をへすしあをうらふうふ人おけ此山のうらまは
むつきとも川に川の葉も度は位をぬりしよ。者や
はりそ涼きこと三人ともりたりすそりくまも目もま
ぬきしきいとおりにろく候うすめそ人のこいん
こいおひいへぬ折しも笈をたふすて笈をまき
る人へおゆりそのまぬをなまうりりつとまきたつ
白き木もりふ者れをふまうして面をこしを例の
政亂雅夫なりりりおる者まこいんまといんをこり
来れりしよ涼き者ちりり色は者中山家の親とえ
は布し九も六世席の上みさしわうり候は松の下
おもころやすしすしひ中のせんとおひいたち

てまらおらる山跡と志のきほからうてこまよと云
もあは枝とりのまらうしきゆしうもこのゆい
お拂ひて席の内よりと炬火をさきおうして志川ま
うらひて夕候こまゆるとして山内との者有り
もうりきてゆきちやうき遊のけちちと有
返しよ
笈のまをうらまひん隙のち者なりぬらんちすハ
大和りらうしおひいひすま。真は糸して来り
共つきてゆりしあ。自己の雅真のまきふ真
雅真は朋友の信を兼とて山陰者夜の古
こめとふくほりぬし

廿一日
ふし植し榎も松も涼山本もりる六世咲者もの古墳

ゆりねむ者のいふ山乃一庵にうまことこりいふ女こころえ家
多えくは笈のいふ川にぬひ来てこふ人もちり一者のも庵
常は土瓶一ツ、飲茶一ツのこめて炭を用ひて煙た
みぬてさりけれぬ

そことして誰こひいふたとして煙かそぬ者のいふ一庵
いひてもこふ人志けき柴の戸に控りこりぬぬ者のいふ
窓より淡路湯山を眺やりて

りちりもけやうえんて淡路湯者城ゆくる一客の明布の
芳野と一客の庵、煙波の芝敷洲亭乃とちるとおひ
やりて

いふ庵煙波の元と恒捨しり一の庵もわるいあきよ
正月廿五日、上河内、谷のふりりの家みで
涙もすう山下の川のきとくぬるいらひの者もあつ

雨中みゆ者をしんく

白妙ははりり一客もえんるゆよも者もそひちくまきぬのそ
廿八日

若師て山のこのめもまきぬふ百法地とくとりの一客
二月に日、常のこゝろをちりて

山言る一庵のぬきふやうくハ一客のそこはうくひはの夢
たるゆえのゆ

障のきもあちりしゆ打志めりぬぬなりぬる明月のそ
二月六日、うつこきこのこをえんて

中絶一久米路のちりもたるのちりもあそこころる曙のそ
同日かほりきまらなりて

あきまらなりてまきぬや一の神代のみもみゆる岩橋
岩橋のこりて

七十^五とせうぬ^六をう^七乃^八母^九の夢^十遊^{十一}く免^{十二}の思^{十三}は
ま^{十四}と^{十五}種^{十六}の^{十七}母^{十八}思^{十九}の^{二十}子^{二十一}芳^{二十二}を^{二十三}し^{二十四}て^{二十五}わ^{二十六}く^{二十七}へ
畠^{二十八}橋^{二十九}の^{三十}苦^{三十一}む^{三十二}せ^{三十三}し^{三十四}一^{三十五}を^{三十六}い^{三十七}て^{三十八}う^{三十九}ひ^{四十}て^{四十一}そ^{四十二}の^{四十三}け^{四十四}を^{四十五}
一^{四十六}宗^{四十七}院^{四十八}宮^{四十九}へ^{五十}あ^{五十一}て^{五十二}留^{五十三}つ^{五十四}と^{五十五}て

いと橋のけしむす苦を^{五十六}あ^{五十七}め^{五十八}を^{五十九}ん^{六十}と^{六十一}ら^{六十二}あ^{六十三}つ^{六十四}と^{六十五}は^{六十六}く
二月十六日西^{六十七}乃^{六十八}上^{六十九}人^{七十}の^{七十一}古^{七十二}墳^{七十三}ま^{七十四}る^{七十五}也^{七十六}

弘^{七十七}川^{七十八}や^{七十九}も^{八十}ふ^{八十一}き^{八十二}ゆ^{八十三}き^{八十四}の^{八十五}お^{八十六}め^{八十七}あ^{八十八}ひ^{八十九}て^{九十}後^{九十一}き^{九十二}し^{九十三}む^{九十四}花^{九十五}の^{九十六}あ
弘^{九十七}川^{九十八}や^{九十九}ち^{一百}ま^{一百一}と^{一百二}西^{一百三}乃^{一百四}上^{一百五}人^{一百六}の^{一百七}記^{一百八}志^{一百九}ふ^{二百}り
洛^{二百一}西^{二百二}雙^{二百三}思^{二百四}の^{二百五}布^{二百六}り^{二百七}西^{二百八}光^{二百九}席^{三百}あ^{三百一}て^{三百二}亡^{三百三}母^{三百四}五^{三百五}十^{三百六}回^{三百七}忌^{三百八}を^{三百九}志^{四百}
さ^{四百一}し^{四百二}ゆ^{四百三}つ^{四百四}ひ^{四百五}し^{四百六}ぬ^{四百七}を^{四百八}め^{四百九}つ^{五百}し^{五百一}西^{五百二}乃^{五百三}上^{五百四}人^{五百五}の^{五百六}法^{五百七}正^{五百八}忌^{五百九}日^{六百}
母^{六百一}あ^{六百二}り^{六百三}り^{六百四}ま^{六百五}い^{六百六}ま^{六百七}も^{六百八}わ^{六百九}く^{七百}し^{七百一}免^{七百二}落^{七百三}孫^{七百四}れ^{七百五}乃^{七百六}の^{七百七}も^{七百八}を^{七百九}
才^{七百一}あ^{七百二}り^{七百三}わ^{七百四}く^{七百五}ら^{七百六}り^{七百七}の^{七百八}葬^{七百九}乃^{八百}作^{八百一}法^{八百二}を^{八百三}り^{八百四}し^{八百五}て^{八百六}
款^{八百七}ま^{八百八}り^{八百九}も^{九百}を^{九百一}ふ^{九百二}花^{九百三}の^{九百四}な^{九百五}め^{九百六}く^{九百七}先^{九百八}志^{九百九}る^{一千}人^{一千一}こ^{一千二}ろ^{一千三}此^{一千四}外

ぬ^{一千五}所^{一千六}を^{一千七}抄^{一千八}つ^{一千九}と^{二千}も^{二千一}と^{二千二}を^{二千三}け^{二千四}り^{二千五}し^{二千六}と^{二千七}い^{二千八}り^{二千九}し^{三千}こ^{三千一}ろ^{三千二}や^{三千三}く^{三千四}
十三^{三千五}回^{三千六}忌^{三千七}ぬ^{三千八}ら^{三千九}り^{四千}好^{四千一}ま^{四千二}ん^{四千三}の^{四千四}う^{四千五}ち^{四千六}ぬ^{四千七}あ^{四千八}り^{四千九}ひ^{五千}つ^{五千一}も^{五千二}を^{五千三}ぬ^{五千四}
め^{五千五}ら^{五千六}り^{五千七}ぬ^{五千八}十^{五千九}と^{六千}せ^{六千一}あ^{六千二}り^{六千三}の^{六千四}こ^{六千五}の^{六千六}た^{六千七}る^{六千八}我^{六千九}後^{七千}の^{七千一}世^{七千二}の^{七千三}花^{七千四}の^{七千五}よ^{七千六}も^{七千七}
長^{七千八}次^{七千九}を^{八千}衆^{八千一}へ^{八千二}と^{八千三}て^{八千四}流^{八千五}う^{八千六}す^{八千七}こ^{八千八}と^{八千九}う^{九千}き^{九千一}

お^{九千二}の^{九千三}う^{九千四}ち^{九千五}弘^{九千六}川^{九千七}寺^{九千八}あ^{九千九}く^{一万}田^{一万一}位^{一万二}上^{一万三}人^{一万四}の^{一万五}姉^{一万六}を^{一万七}流^{一万八}う^{一万九}る^{二万}之^{二万一}
より^{二万二}こ^{二万三}の^{二万四}う^{二万五}ち^{二万六}ま^{二万七}い^{二万八}ま^{二万九}も^{三万}わ^{三万一}く^{三万二}ら^{三万三}り^{三万四}し^{三万五}一^{三万六}有^{三万七}也^{三万八}
山^{三万九}家^{四万}の^{四万一}あ^{四万二}り^{四万三}し^{四万四}ぬ^{四万五}ら^{四万六}く^{四万七}ら^{四万八}く^{四万九}ら^{五万}く^{五万一}

法^{五万二}乃^{五万三}後^{五万四}世^{五万五}う^{五万六}け^{五万七}く^{五万八}む^{五万九}と^{六万}り^{六万一}や^{六万二}を^{六万三}る^{六万四}川^{六万五}寺^{六万六}此^{六万七}流^{六万八}き^{六万九}え^{七万}め^{七万一}し^{七万二}
去^{七万三}乃^{七万四}明^{七万五}本^{七万六}乃^{七万七}也^{七万八}

以^{七万九}て^{八万}阿^{八万一}禮^{八万二}と^{八万三}し^{八万四}長^{八万五}も^{八万六}深^{八万七}き^{八万八}弘^{八万九}川^{九万}や^{九万一}屯^{九万二}の^{九万三}席^{九万四}の^{九万五}ま^{九万六}ら^{九万七}れ^{九万八}明^{九万九}本^{一万}乃^{一万一}
流^{一万二}湫^{一万三}乃^{一万四}仁^{一万五}有^{一万六}亭^{一万七}し^{一万八}の^{一万九}の^{二万}不^{二万一}時^{二万二}又^{二万三}つ^{二万四}も^{二万五}つ^{二万六}位^{二万七}
か^{二万八}む^{二万九}と^{三万}た^{三万一}り^{三万二}し^{三万三}と^{三万四}く^{三万五}奇^{三万六}母^{三万七}山^{三万八}と^{三万九}妙^{四万}舞^{四万一}色^{四万二}の^{四万三}千^{四万四}
種^{四万五}乃^{四万六}秘^{四万七}を^{四万八}さ^{四万九}る^{五万}妻^{五万一}は^{五万二}り^{五万三}一^{五万四}盤^{五万五}の^{五万六}花^{五万七}此^{五万八}下^{五万九}席^{六万}と^{六万一}口^{六万二}は^{六万三}さ^{六万四}

わしとちとちと又うらみあはれぬ。弘川でる花のつり

長野山みづのやま平尾のやまもはるつ 弘川寺乃花の来々あつぎくれ

或人は弘川を名も似と、あひの外、小川みづとてと
一れとらひ一し

谷せとく候くれくとも、はるは海を通ふ弘川乃ら
名消山色静

きのふすて山乃ららるるも、花もはるも、春の長はる来さ
梶井宮のこころちになつ久たるとし、後後何なり
あはれ地をこころひく、なつみ立海とく、さく、咲阿ぬ
津園のさく、びんく、玉の結ばさく、世またる
ら、はま、く、る、春乃ををらるむと、ちく、ちく、程さく
所まらりき、その云入るばんく

く、返し、え、ると、悲し、此、玉、弘、み、う、き、一、祠、の、を、ハ、抄、り、く

お、好、し、年、は、又、光、ぬ、る、人、才、ま、ら、り、き、く、以、悼、と、侍、り、て
抄、り、わ、く、を、め、も、と、く、候、う、ね、同、し、老、木、ハ、朽、ち、る、世、又

卯、月、六、日、南、田、堂、山、再、真、立、柱、の、日
堂、通、つ、南、岸、乃、き、一、方、く、二、度、う、興、き、北、方、最、浪

日、秋、郭、公、の、は、の、う、み、あ、つ、ま、り、れ、を
老、く、所、れ、く、き、も、ち、を、う、一、夜、此、夜、を、祢、是、う、ひ、る、山、時、鳥

七、日、乃、夜、る、中、日、不、と、き、に、ま、き、く、く
う、て、は、勢、も、き、之、に、あ、る、に、お、好、し、う、さ、れ、山、中、と、き、に

深、秋、郭、公
秋、ち、く、て、所、行、む、ら、の、小、夜、ま、く、山、の、月、ふ、鳴、郭、公

月、前、麻、さ、在
秋、ち、く、て、所、行、む、ら、の、小、夜、ま、く、山、の、月、ふ、鳴、郭、公
秋、ち、く、て、所、行、む、ら、の、小、夜、ま、く、山、の、月、ふ、鳴、郭、公

卯月十八日、富田三位延晴の御方、御産書双

首夏水

非但や花の鏡も色之くも糸はくもさ萩乃下り
かきう山は涼く涼くはあまなけくも春の波浪

父の七回忌より

わく佛の号号城五句の上になんぞ遊覧の奇
きりし人乃とて夏懐舊

懐舊涙

今もあまの神の若き掛くあまのあま

卯月廿二日、一乘院御殿より

墨雪

不うろくをく此流之く春日の墨にうねり

ぬみかき一草一木此夏乃流之く若くは小蛇の山星

同廿五日、春日乃山はくもろく林麻大急席へ入り

流れくまうりに時多るあまの通影にて
をのく

侍郭公

流れさか杉あまの人の心くまを山はく

同廿八日、一乘院御殿より

忘夕

い流すくも一草一木此夏乃流之く若くは小蛇の山星
流れくまうりに時多るあまの通影にて

同廿九日、春日乃山はく

忘夕

忘ひられ流れくまうりに神のまをく小蛇の山星

初も多ふぬい乃初りと志れやく境竈北浦乃燧に
五月一日太口跡中庭乃を水むりなり水金川
とせれわれ侍りなれと 泉忘夏

水金川清静しら波せきいれく方散らるる若の涼さ
きふ殿も秋はぬ心ちしくつぎをさる水の香をこにむ
五月一日一乘院宮へ人のなりきる緑毛の香を現
君代の例も心を沁みおむむ香の尾れするに緋
如法院乃庭みさるきとひふ至れさるまを
又にやうりく

表もむらふ月北畠法一木の色もあくにふれ
猿坊 五月四日一乘院まろ

け之重加も定めぬ種源の所を深き北風は任せ
友も同じあや免れ茶まつきふ新来北畠母なり

葛蒲 日五日太口跡

云の紫ふくそうさむあやめ茶まつきふ一水北畠も常と

澤堂 日二日口跡

心われや表まつんごと飛堂と作花咲反北沃堂
飛堂深きあひまふと経ても候はあにうつすす
追悼 在り世々奇しくく志まけをれた子の

許又つうくと通題実あり五帝と守侍

云の紫北畠のこゝめてはあのと消ぬ人れもあま
日十日急照寺乃ちやへ一乘院文海くせん
丁ひてはるえりうらるるけは北畠とよめ
このゆのりま

夕日新田面ともうたひてんもすれぬれあ苗

同夕書目

足踏うは涼しくちるぬをのつらけり日の影を月よわたり
十五日は比を子苗ころとく田毎水城すむせとく
常より多へつる比の水とくつらけり沙りたれとて
ほくもくぬ

比を比地の水比るうく母侯きやふたあまちうへ
日十六日時母ぬひくり比るのうらさりおれ
さるうら比てる乃心乃心は墨く何なるも大報
を打らうししにむふた天感意申し
りるやもるあまりふたををれ

里阿中くすしはくも打やぬる流えてそつ苗ころん
日廿日苗流川乃布より金輪流ぬやうと光禄師
絶さうやう流さくちん和うら苗流川も近く流れ

日廿二日
山苑 田邊重信亭書

若く皆風よさうひて花さうりちうめまうぬ草珠の山
妻へく世城捨しゆを中をれりくの初瀬の巻城んと
日日苗流川乃ほりにはまぬ人の許あ

早苗

幾里の苗流川北下まきに子所母系く子苗みくむ
型にかたり比阿る城んと

ま六さそつさむねん又りむと新むらりのそよ
田面の鷺城んと

里標

阿古咲花の標やまう里と薄い葉れさうとく
鴨河

至治やかろ火を紀川よもくく流ぐわの六時の房に

樵_{ヒヤイ}丈

安きも阿やう紀_{ヒヤイ}乃ときる夜心ちすれをの、山人

夏枕

くちうにむく神枕_音あけうう収す一夏_音の寝

又月夜

時みくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 阿まふれわやうりみくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 あり毎月二日、一乘院法殿當座右又首宛探歌

胡氷室

少室山志をも本陰此胡室くあうり歌もちうに魚くそ

寄画意

魚くくも程むへくくくくくくくくくくくくくくくくくく

炭上松風

兼代をえふそとくくくくくくくくくくくくくくくくくく

海眺屋

比のあうりう人乃長きくわうりもあこれくくくくくくく

性事如夢

うううううううううううううううううううううううう
 やううううううううううううううううううううううう

散あもすくくくくくくくくくくくくくくくくくく

六日の卯本の母一乘院法殿あく夢申

文母今何うもくめんをのつうう盤にも山あも及ある代を
 同日回新あくくあ申_{ヒヤイ}在三々通歌

浦夏月

村あも難波のあのみくくくくくくくくくくくくくくくくく

納涼風

風をよく撫うなれ夕暮の霞みくもく
名流やハハ
惜別恋

月をよく撫うなれ夕暮の霞みくもく
名流やハハ

菊此花一つみすきふし
かきうへし
繪

秋のむねは
かきうへし
繪

八月三日 龍波忠徳亭
あきく
常

初秋月

秋のむねは
かきうへし
繪

八月十五日 秋 弘川
あきく

水の音も空も通ひく
弘川やあきく
ぬ
森田何く
亭
あきく
龍波津
あきく
水光激

灑晴偏好山色朦朧雨亦奇
あきく
西湖

東坡あきく
佳景
あきく
を

詩の
あきく
好
あきく
二
あきく

亭
あきく
あきく
あきく

似雲美袖
弘川
あきく
あきく
あきく
あきく

あきく
あきく
あきく
あきく

高野山大徳院
和州野原
知屋
寂
穎

あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく

あきく

あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく

あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく

あきく

寂
穎

くちりて麻のまとてよこめようーとひらつてをくらぬま
お

珍しき祠の花は以新登へては後へはあふまよ

和州智系^の里^に碓^田亭^に松^林とんく

末らうく^に世^にれ^うう^にに^きと^枝も^あく^を稀^ちる^る表^れ一^本

回く^み物^くこ^とし^ふ不^み言^す物^を心^ま別^不回^通律

寺^乃里^坊阿^り世^に年^久く^ここ^ひま^すて^さり

を^れて^おり^ひま^く寛^保此^をし^めの^とし^長月^乃

比^経收^りを^るみ^言す^物乃^真神^律師^はお^り卯

月^十八^日は^遷化^し給^ひお^つけ^坊を^あら^うお^り

く^降信^もこ^と世^にと^せ中^人つ^ここ^に此^をう^ぬと

人の^いい^しを^けら^うく^おし^と秋^の心^志の^り

み^くれ^く神^のあ^らう^くら^うに

あ^らう^き二^分の^ぬぶ^まと^月二^分の^てれ^あら^うら^うま

大^和何^内の^さひ^らう^るお^誠坂^の津^中源^城乃^く

う^トお^ひも^おあ^ぬ何^内ら^りや^まと^にも^るお^誠の^坂

回^函せ^きや^とい^ふあ^らく^宿の^あら^うに^つら^うと

大^和海^や坊^もあ^らう^もや^まら^ひぬ^こむ^る関^屋此^人の^あら^うけ^み

九^月十^三夜^のあ^らう^とせ^しは^後あ^ら下^句

花^はま^らう^那る^世を^乃賞^也

十七^日の^夜ら^うて^廉の^三勢^うと^うみ^啼を^らを

きて^て三^勢の^候の^りは^とあ^ひ合^せく

神^志は^るあ^らう^らみ^をと^めや^らひ^すぬ^るを^廉此^声

庵^乃ら^うら^にお^きつ^き一^奇

菴^せと^とむ^も心^乃弘^川や^らう^おら^につ^を海^山

池上月は思く

おれおくこにむらあを地あもはにくまこぬる秋まは月

山路の菊さるるは

をのつら山路のまは庭あんと世まはそとや花は求

九五日祖母系芸理法夫婦五十四忌

もふたはあはき神のまは系五十四秋を思ひく

庭乃柿の木はな

是もまは神のまは柿の木に心はをわくわくおあ

山乃小鳥のちれをれ

え高くあさくめす花鳥もちれをれは采は唐り
期り教さしとふ朝はお系に友誘ひく色鳥のま
是もまはこむしせり世のまはぬ山は鳥のちれを
りとなく山の小鳥もをのつらあはにちれくあさるは

唐城ゆく朝のくおむむんとせしは少るは為に

このまは残しをくおきのおちまはうまは系をへ

る

山かく位ぬる唐城あくいまを訓し小鳥も我やあ人

若水居士十三回忌

志られさうあ人の認さひくまはのま回の神をわさぬ

北村亭に松間紅葉城

一志はま子入れ色もいろさひぬまみちぬまは枝をかり

御父乃忘り

神毎月ちげは引ひんあ長秋まをわあし神乃くらぬ

神毎月十日白木といふ

今朝もん秋里を志られのせあうりるは山の麓のまあ

十一月二日、難波みをめる人の心は祈願ありとて、
奇りきりめりれを

難波江や海を彩ひたしは漕舟の舟のあはれきりす

五日 寄松祝 松州山田村林亭ありきりす

君うそ松の小麦は生をひく代にまゝ心人れを乃を

咲花を羨すうりうりうりうりうりうりうりうりうり

九日 寄華京 普及山光徳寺ありきりす

衣收毎に尾をり袖を括てもかたにふぬ庭のを草

色かり秋ふもみわかれをそをむの草れをのともは

三寶殿記

元文五庚申年閏文月末つゝ津乃國神峯山大川寺

みまこととる比普及山光徳寺獨麟禪師

三寶殿とに於一帖を神に奉まゝり、まろりうめをこま

禮も丹列大田邑金剛山龍潭禪寺ハそのうゝ大寂

常照禪師此同基志のひー靈場なりとさきと

や一し月うりく破壊に及つては特嚴和尚うゝ

うぼりいませしとるまのうゝ抄の流補のくゝ

のこゝ大室祖塔とていとうりつゝ月く年く心

のまににおとろりぬえうの阿とてかたてあみ大義經

ちきこゝび歎きく信心乃檀主松井宗知同姓宗無

乃ひ特原のやうりれこもうゝ活流の國松本みまめ系氏

不向奥村為英とてお中くれんく大流き一ツに

しゝく大義經をまにおさめめてはつらまふくおひ

まろりくお乃をしもむきをわろりもれて福師感心阿さ

うゝた流り又船をゆるる心地しゝ二毎ひ八重れ志不

ちを凌からしめて長流はしり唐本の大義經定

うさしをさうしんといひしを。着水きくく不思議な
い。波妙幢より巧なりし佛首は半杖。むらうに合され
し。符節を巧くせしむらうしん。たゞ佛をこしす
所はもと清き。波人へむらうして。家はいそぐし。此右
のうさし。のちうさし。のち。是も。惠心乃作。形を。今巧くせし
るに。すし。此みくし。と。なり。く。此。元。此。正。なる。に
ま。く。に。爰に。獨此。禪師。ある。此。右。色。此。半。首。杖。え。く。
左。色。の。半。首。を。以。に。り。く。ゆ。す。介。く。也。正。と。う。ら
さ。は。み。う。く。は。あ。や。し。も。この。佛。も。人。乃。志。する。と。也。お
り。は。え。委。わ。く。に。淺。う。ぬ。え。し。あ。る。く。佛。の。み。ま。く
所。を。是。れ。さ。や。し。わ。る。も。る。ふ。る。世。に。半。杖。の。く。は。半
首。は。半。首。杖。あ。く。ふ。え。る。所。も。せ。あ。く。む。ら。う。に
巧。く。し。半。首。を。巧。く。し。合。せ。く。全。記。佛。像。と。あ。り

形を。同。作。回。合。く。法。尔。此。功。徳。以。く。ぬ。う。を。至。た。也。
と。し。ひ。を。禮。し。併。賢。人。も。を。に。あ。て。た。と。ぬ。く。に。也。深。く
感。心。く。く。その。ら。海。く。あ。く。さ。ひ。ぬ。く。禪。師。着。水。の
家。は。い。り。し。時。志。く。此。志。と。う。り。く。波。頭。く。杖。を
う。り。く。是。う。く。長。短。を。考。へ。ぬ。是。は。禪。師。乃。多。を。と。又
を。し。く。お。く。せ。し。傍。侶。杖。く。く。は。海。ん。ま。い。れ。く。也。
う。ひ。ま。く。も。く。此。禪。師。乃。く。尊。體。や。等。身。ち。る。と。し。と。
一。つ。な。く。を。三。つ。符。合。志。も。る。事。う。使。た。く。是。も。亦。奇
形。於。う。妙。なる。哉。時。し。り。く。此。佛。首。杖。を。し。ひ。ゆ。し。
禪。師。の。歡。喜。確。確。也。し。を。の。於。へ。し。志。の。の。こ。う。く。に。
は。三。寶。殿。の。記。を。妙。心。寺。無。着。老。禪。師。乃。執。念。を。り
む。く。昂。筆。記。あ。し。り。ぬ。さ。る。み。あ。も。い。さ。り。記。是。を。又。
童。蒙。の。こ。も。う。り。也。ん。や。は。さ。う。く。世。を。め。ふ。と。我。り。う。る

かきにははるまじくもや。特・嚴・禪・師・つ・ね・く・の・中・品・と・あ・ら
 り・れ・は・と・く・う・り・つ・き・ひ・は・は・ら・く・お・れ・と・と・め・る・あ
 ひ・し・事・禪・を・終・身・云・葉・ち・く・と・使・れ・と・い・ま・り
 を・博・学・あ・ま・乃・大・禪・師・と・名・か・き・に・深・筆・あ・る・し
 を・お・れ・う・記・み・書・や・も・う・あ・ま・く・む・と・た・り・六・字・た・か
 於・竹・を・す・終・ら・に・作・ま・る・せ・し・あ・ら・ひ・な・ら・は・し
 波・特・禪・師・い・ま・と・お・せ・と・こ・う・く・に・ら・る・ま・て・し・て
 さ・ま・と・い・に・し・や・し・ら・り・所・梅・の・梨・ぬ・と・ま・ま・は・て
 ろ・記・記・あ・く・せ・乃・う・終・ら・に・あ・ら・ひ・ら・む・と・せ・ん
 上・魚・ち・く・と・し・あ・し・く・り・記・云・葉・は・本・記・に・也
 法・字・く・金・玉・り・尾・磔・は・ら・ら・し・於・ら・の・形・く・し

此を馬をらぶ其葉人一つりて
 こつのもうられこ乃造りし

寛保元年閏辛卯月八日

虚空菴

似雲

六十九葉

左判

紫雲

蕙垣の中れ乃難も道つさぬ也此魚もそハ今宵はうりよ

除秋 庚申

うそふぬへき今宵分記わつて行まらや幸此冬秋を
壬戌元日立春

去冬七奉時もあつ守阿く玉此春乃先とわきそ長宗さ

梅はんく

春きぬと梅もほそ心荒滅の山秋此子と花はうりうを

初春詩苑

春立やあつ一の山も長閑あつて海母うるもれ乃面影

四日子日 不ろ無尾もまま月

兼代乃例も云余余の尾此緑の小松もよの子日よ

あそ棠

浪濤の山房をうぬ芥川はせうやつしーあぬむ比

松尾此御社ままうて

神代を色々も春は咲花も美十わううすつれるの文

梅はえろくのうばかろ免やま

不ろ梅程も春秋乃あむひをあらめく星やわとめ

詩苑

清心も春の都人いほーこの心こころをうとせ

八十試祝ひまま

八十子世のわさー此色をむ松もまの春にうえて

清水何ろー家續此例は初ま登りて年毎春

清なりおはろーあおほやあまさりうろふこな

ひろ試祝もあつ

常もあつ親試をひ来くあま母梅も勢此のとらさ

凡早古中納云實種の海なき礎を干深と名つ
を給ひしはまろくくへん色は世をりりのかつともう
をくくしてちる免く那に良妻

かきて師まろり此海のを干深うひちるき波の藻屑せ
は礎小一乘院法親王尊賞少びひくこと
佛銘佛深筆あまりふれし

獨麟禪師の遷化をいりてまろく
後とあまひもあま悲しき八社ぬおとろく人の世なる
随雲師所まろりける比夫あまろくあてまろ

二月初十日
四位上人二首乃由録れえ海をくくく弘川寺古
墳しあむあてまろ

むまは今日まろり此の花境は花なる人まろりめ

三世諸佛乃る教をおこまろく

えになくはらくおまむ目のあま三世の佛れつ教をく
くはし金三世乃佛の教くもつら海の外まろりえん舞

十九日君のうらまをわ
海者まろりも冠もまろりあまま表はまろりあろくまろり此山
廿三日

長閑しお月もあつて夜む衣のぬり山まろりまろりまろり
廿六日東南院文教遷化廿八日葬送しつらと
此世のうらま西の上人あろりつらあろりあろりし
以塚といまろりあろりあろりまろり

まろりあろりあろりあろりあろりあろりあろり
三月十日誰ろりまろりあろりあろりあろりあろりあろり
まろりあろりあろりあろり

色も若も深き心乃花さくらりりの人乃又誰う極き舞
池のうきな杜あをるあつあま生をらるんく
さうぬる心なこめくわきつりくさ花紫れ色や海く舞

若本此極をるんく

抱きひるうりまやハ老くんる花も若本此妻の坊を居

十四日

淡うぬ色ま白ひよ不うり弘川守若花乃さうりは

十五日

妻とそも花しさうはをすれはま誰うこひこ世山乃原家
入方此月を所にしむ妻をうり花あう山此明本乃抱え
秋ふもをうりおさゆら月影のうとこく持る妻の明をれ

十七日の夜堂れす人の花ばんく 堂二 宗善

淡にも今宵此月とるうめむと志ハ一やばらふ花の下を

似雲

赤らひくも月女をんる山守此秘よとの鐘を心くは守

花乃山 心 心や心とくれ乃山さうりーのちをせもーをらるは

落花乃古跡

若とのこうさけえれを散花の白ひまうすむ夕暮れを
うりゆら花を地りしを比おもこ本まうはりる若とんく
月夜池あり花のちるばんく

文坊を居もきくくをむ月女をちりううふ庭乃池あり

松間と落花

ほきささの色まうらう枝あす松乃あうりに花もちり

二生極

夜うけくも花も咲をへをを極妻れうこの色は海く

落屯

さうりくく色もれは六吹風よりうもさるる屯れしる者

古八日

足家花又妻の名跡おちちむ清々すれ色もちり共
老の才も心ひし色とくをを操る所ひつる色やにけり世
妻ちうらゐの名跡の朝志めり松原りし山表通途

河落花

とそられ色もえせりと散花を河原よりとる妻れ山うせ

入月面久

たまや〜とらいつととつくまちちめ縁ゆる入月面の二を
以りも今年かまはくさみされの成源くはく新れ泉お
あ五月毎尾乃仁有亭一とく

船の尾れ遊はる雖限は六井川有仁とる者の涼し〜さ

嵐山遊の云々また入夏もす〜くさむる夏の夜乃そ
さき梅又夏をもあ〜し子源河風入持も〜く〜とて舞士
大井河清くちうねな松して夏も唐うん流のまじは

夕立

西きほひ〜 高〜

夏ながら嵐山の名またて風誘ひ〜るる乃とを〜さ

雨後夏月

月影る所行む夏れやう乃山す〜ぬ秋もゐのちうり小

大森亭ま〜く夕立せ〜と

折しちりき琴の暮る〜松尾のゑ誘ひ〜る者の名〜さ

文月一日の曉初〜りさの葉扇をよひや〜く

あむま〜さうのいさう初初〜ふ初さあ所行〜む秋の初うせ

回次雄心院ま〜りさ〜しに新難の声さ〜りれを

〜訓しくぬるれ声あ〜ちう〜新よおと流くあ〜のち松

四腫乃全讚

昔々も若くもむむと一虎もさう四つは腫は此一ツあはれ
相江先生所傳りり一送文袖と合玉乃聲耳なり
うふふと心ちりり感慨とくふりす

感漫次尾聲

為舟老人

忍身流涎花野虫京城曉樹思何窮非只露

再次虫窮風の三礎

露下鳴葉葉の虫よ月氣もやうり窮めぬ野近に秋風

五日流涎乃葉落りり

秋露や弁山の風乃香と夕露と夕露と夕露の海を

六日立秋ちりり

風の香もくささる空かたも山子の古及秋や木ぬえ

秋の虫ハ多ふううあてぬさうの山残る暑さに蝶と鳴る
まむ扇も蒸くうりぬの葉枕むの香いろを秋のさう程
白露乃うるる哀やあささむむさう程の花一りけと

虫聲非一

弟の戸をさしてふ聲によせかた月よ小川草やうん
河内國石川郡弘川村熱堂へ納金 尊教一軸表書寫

百万遍の念珠一連地度寄附するの執念ハそのま
る山寺觀音菩薩壇乃佛示現狀蒙り西河上人の古
墳を尋るるり波佛忌日十六日ちりり

寛保三年癸亥二月十五日。法夜よりしりしめく。此
高弟に香花供物をとる。面てまらる人く打とる。
去實心に称名念佛。法夜よりし。是此上人乃靈位に
追善供告し。年よりし。法夜よりし。弘川寺へ寄附施入
此よりし。法夜よりし。村の僧侶和順。現世安穩
後生善不。佛果菩提不可思議。乃結縁飲茶のあり。
老涙ぬかす。

五畿内志作者。并河五一郎永。報恩謝徳

和歌佛宗通。武者小路

准大臣従一位藤原實隆公。報恩謝徳。佛果菩提。亦為
教く。此念佛。此功德。法界融通。平等利益。礼恭敬

阿弥陀佛也。ころころ。ころころ。法と名を再

西へ行はる。法夜よりし。ころころ

釋似雲

書之在判

寛保二年壬戌文月十五日

同日廿六日。石山寺へ系籠通夜。此尊就一袖。法波
本堂に高弟に物をとる。面てまらる人く打とる。
大悲薩埵。此法急眼と云。ころころ。法夜眼よりし
高弟。ころころ。ころころ。ころころ。法夜眼よりし
如く利益。法夜よりし。ころころ。ころころ。法夜眼よりし
是。

石山やうりあめく。あめく

玉河川。名法。手振云の

海より繁ぬ

花は地し人びのきこきこきこきこき
秋の種はまよはるる花は地をりる人のこまかりへ舞
或は種はへ盗人の心まよはるる梨実地をりるを
きこきこ

阿豆のふびりこころも三ツの輪は掛く六ハ一物もる
八月十五夜清水亭みく

まむ月はたふくまらん今宵はなれのとこは秋乃羊天
詠守石清水乃こや一語はまよはるる

月夜くまふも清水といふ一語は種のみ世月にまむ人
草席の秋さうりるる比

笑蘇をにここのこころ掛てし誰うきやまむ草花席よ
忍乃一字のこころをよこしてよこせはあま人の心ま
くれを

まの毎にまふ心乃るうり世ハ憂世の中をいそごころん
さうりの秋られさるる山乃小鳥りり地へりまむ
髪もきこえさうりくれを

ゆりてもうま世にや山人とやまのこころや席もこひこぬ
重陽

まのこや九初さぬは笑菊は九不形花乃巻り
涼山二席

席を鳴る水鳥一ツは奥山ま本れ葉乃片月ままま
九月十三夜

草花やさうりまあはるる花をさうり今宵はえし長月の影
萩羊さるる程もさうりくれを

ゆりま傍しこおをわくこやあま雲こころ長月れを
停午月

秋め今ちひの海より川わたり見ぬめれもあはるえに

秋夕
とら海深るにりり日れ影えくあはれも消る秋乃夕言

小田も夜をきこく

さびしこのなるぬ秋比もうけきまつる田れいぬくの夢
まの人の夢よけきけ秋の田れかりをもちぬ心つら

懐舊四
ええう夢十三回忘小村何うしり初進

きふた控やん如くぬふりさうあちぬの昔志のむ

正三日池の中ある岩よ小雲をうつし極

きふうし人ふりせれを岩上に二葉の小松子世々うさこ母

廿四日秋

きう徳奴老の秋さあのをむ秋よおやうしり虫の音
をくもも浪りしとあま夜をきくおは枯れ松むの夢

秋奇の中よ

山楯は炭のさく折々くは葉のたぬく人の子さ
くもさも別く忘れたるれや葉をひらうらうら山
あなをいふをそめあむ山さきれ一葉の色も子控百くさ
あ方のさあさうら山末野の星の梢も海のやま
くれし

胡弓は秋の梢々和田のさう八十海うけくは

秋祝

嬌さもゆれすはむはは々年ある秋の毎のしほを

昔妹

秋とつかりねれ葉のさう枕乃るもさる初一夜もうら

初夜

子枝は吹志のし森の娘も控をさうみやまめらん

本拈

地もまたも好のうらみとるりのを今も色ちき本初りの夢
冬月

大空にぬれむくせと地をて 阿片にゐるを此夜の日
奇のときさひし人みほり守とく

款わく云禁はきみのほり本深き心の色やえはく人
心静延齡 八十賀初進

半をを從ちつうねるう海りくちうは硯の世しをわう一舞
冬 釋教 實種口を忘追若地早宰おつより初進

をきりおまを法乃破まきて面新ゆる冬の秋乃月
十一月一兼院又ちり清まらぬ

寄松祝

子兼三母さしていざし三の山笑万代をまんの女り

心ちうは人ちうめささくひく奈良の都を出し人をの
つうそこの心さしわいねく三とせの後二ふむ竹乃
此園よりわさまておほ人あまのあうをましくも
ちやつうあましとびら海しひまうく

天何為し人のち地く三とせみゆるりの娘
世二雅翁の辞世母さうられくちもく
いやまの月れ心ちうめと福せられしとす
也指人心見性成佛のう海をましく 盡る初進
は

二つかき心乃月をさ守指まやうくきくる世世のうをせ
ありの復別しほの福業あすこのうをさしひて例
の腐葉をくくちるまし大あまのうとあめのをま
れしこくむつしした人乃神にきくねるをえはうく

去るを此玉以連——云の葉に候の玉を掛くらん人少くも
十二月一日

江上春雪 小梅庭ありく当在

維波江や河もつのかむ春風を梅うかむとむらあけほの
いとむらめおれけしはま入はうとめははるまきとる

寶生院下持益禪のころ——三葉
富士の林原はむらむら立日ゆるむ 尚永

胡蝶子守りよま春の時やあるあるぬ名よふらふもふりく

和漢の同じや等けくくくくくくくくくくくくくくくく
唐大和とこの花の色をくく 七十葉 似雲

定えらるるぬふ——のあり雪

約雪道人画

渺茫東海東 擎出玉芙蓉 千葉雪 蒼々

遍骨春風長在羽衣松

十二月五日竹室乃清言このより三笠山の雪をえく
春日野の底のききくく三笠山よりあふりたうねの初雪

杜時雨 当在巻段

むらむら春のききくくくくくく山帯もくぬ森乃下を

夕雪 当在

名残ろく入日れ影を消てそくくくくくくくくくくくく

下々くく波をききくくくく川にけりくくくくくくくく

禁中御殿とくく一葉院宮もくくく

禁庭雪

誘ひくく冠も庭も輝けくく九初雪くくくくくくくく

雪中娘

皇太后の御詠歌と母皇衣より御詠歌わけくしる御書
古六日御詠歌御詠筆 尊賞

ちりちり地を歩くと御詠歌の御詠筆と御詠歌の末も御詠
一葉流官尊賞。親王御殿より七十乃賀詠り
御詠の御詠の御詠の御詠の御詠

紫葉

以上御詠の御詠の御詠の御詠の御詠

寛保三癸亥年

一葉流官尊賞。御詠の御詠の御詠の御詠

長閑の御詠の御詠の御詠の御詠の御詠
日時麻の御詠の御詠の御詠の御詠

乃と云ゆる皇太后の御詠の御詠の御詠の御詠の御詠
皇太后の御詠の御詠の御詠の御詠の御詠
乃と云ゆる皇太后の御詠の御詠の御詠の御詠の御詠

春日野やいづくの御詠の御詠の御詠の御詠の御詠

皇太后の御詠の御詠の御詠の御詠の御詠
皇太后の御詠の御詠の御詠の御詠の御詠

春祝と云ふ御詠

皇太后の御詠の御詠の御詠の御詠の御詠
皇太后の御詠の御詠の御詠の御詠の御詠

秋のころに花もあけまゝに異作の葉山くれば當れなく
浮世の 日新

ついでに妻のこころをわづらひて飛鳥川水城なる秋風のさむきを
新つて此とらぬもささえたるに君なりしはと春乃山風
禁中御會始御題一葉院宮よりわかれし

妻色柳先知

良木を掛くもいづる妻城その名にうむる妻柳の系
妻を先心ぞくはくぬ風もこころの妻柳の心
廿一日一葉院宮御上洛乃及泉川の舟よりり
湯遊覧乃以御上遊くめさせ給ひくいと
くるとるもいづれをいふかとおほせおとらるる
さりつと口をさすひなる

泉川よりりわ波の花もあけまゝに白くもよ乃花をさ

初魚りこころは山くろり一花を一首はほく
長比しり不乃様のおくちにいへ給ひし後
清きよ侍し時ころくめてまゐる

妻は秋衣をせし春日心さわいわけてあはれなる川
二月九日大森亭一君はりりびん

松竹のきりめをそれとんころり妻あつし九つり
ゆつり君の指を花をねや唱響の聲れはほひり
十日のまはりもころのを所にあたりぬる老乃と
こひもしとてはんせもきうせりと清利恒雅夫
許よりくこころをさすころり比こまよりぬと人の
こころは

老らく此所のをれに我語る人をもとを添ちりり
はれちてはるい所も妻の君きえに人乃何をれり

園位上人乃正忘日母の向なる

抱れかうらもふとむむ世をさす枝のみけを妻れ古つら
此さき末つらいつこの世さ乃満たり

末掛くみるめおれ引使あり一以舟おむるされは波

あき新あき

子世あしと母つぎぬえの禁び一本にんさる庭乃根う枝
ゆらひ母をめお村何う一此庭の多きまお水石
佳執あやしくくちりりわし

けくんぬ子里此外の海山もう海みうつと庭の池あり
扇日觀至信老袖たり予う荆棘乃末字を和
く玉作一絶の内

九重従是三千里。遠憶故人天一方とあり一
高韻をうらひくら地やうらもさうらう

さしや心お作しやこりりつり日わやく波のきさる

雨ほ花

あわさしとるれ名枝のあさうう入日もあや花の夕棠
花の奇れ中り

笑ゆる生れ末の山さうう卯月くさるる石ともをけく
所を老ぬえの心につくつく杖も花みえる山空る雪路
西乃上人表うおほくの妻れ花びらく染をく心
誰は侍人とあり一あふとあしあひもく

花塚乃花ちるれ染をに一古路れ花を杖又侍くと
生乃末つら大和乃妻すあう人く西乃上人乃
古つのみやうて一以う原家もさひまれし

古墳はうてうらな花も末と棠の一本をびあう嬉さ
母乃いこりこり金し人の涙へ

ときこのふり一面新なるるうらわぬこのまやを記するき
古六日初くほくきにきほまをれし

おきや心るうくもす代つを月卯月の末乃山おとき
時名初者ハちりにあぐともおろき山より近しちを
郭公初者ハちりち反山より妻の名妙乃くくいすの發
里わすしつとると母所城かくす阿まうまつを山おとき
おときにきくともせれつくそとつる系不迷不曉乃ち
ゆらとも誰きくもむ時名おほくき山はあえにうくへ
岩橋の橋むりーと一云はほきくおくく山おとき
西河上人乃古つうにゆてー比郭公をきく
あまつと西河より郭公詠えく山所ハ我をうりこハ

郭公

とせれぬおろき山は初さめーくせる比月不鳴布くきに

つくま誘まつくむ時名あくく山初さめれ老のうけを
唱せていりちゆきりむ時名月ハをるにむ的乃り
時名さくうま名の山獨も月影うくゆる志の先
打さけくわくく心あせ思まればりうられー山郭公

山中郭公

時名かれも田長れ名よ山れも子苗うまところる鳴ん
わらきにれ鳴比葉居をこころん中笑りー人
さもなりりもれしよくくをりもれ

笑りつる人ちこをぬ葉のうまはさく木行比山おときに

返

友信

やうきにらきぬし告る云のこれあをぬう比弘川乃居
比乃杜おねんく
友波もわけくハつりーおきつて葉おくくおほ比あ

五月兩

あつてもやうらも一ツ女せとあくとけりわらまぬ又りあはて
はなしてまむほのけ月のまらりそこれ神よーみり多乃神

又月八日津乃國山田林亭面月日びんく

あつたりさえてままらるるあえとく面とるく夜の月を流りさ

月七日美原度あ

表をきか心むうわ〜糸橋くさ人志け此くふ乃源家

月八日溼虚亭

池初らと虚溼溼〜柳陰さ波よする者此ま〜

初秋

んれら〜地みらりになりけ白雲やあつ〜き山乃秋の初風

あま見え〜風よけ〜く〜る秋を〜れりやうらるる葛珠の山

秋歎乃中

〜そのとれれ〜るり〜る笑花も〜む〜るの色〜る〜れ〜

老〜く〜るの蔭れあられや古枝ま〜る〜る蔭れ秋

夕月の光清え〜い〜る〜人あま〜る〜る秋歎乃中

述懐

色もあ〜る〜一〜れれ〜知ら〜る〜る〜一〜も迷〜ふ〜心不〜る〜

春曙秋夕乃〜る〜る〜と〜い〜合〜と〜

身一〜つ〜よう〜る〜る〜心む〜い〜る〜る〜や〜素乃明〜れ〜秋歎乃中

三界唯一心〜外無別法心月輪れと〜と〜合〜と〜

葛珠や〜ら〜る〜も一〜れれ〜心む〜く〜月を〜る〜素乃明〜れ〜秋歎乃中

海色月

月影を〜る〜れ〜浦乃と〜砂地を〜と〜む〜る〜流る〜る〜秋歎乃中

さ〜る〜る乃秋歎乃中

は〜る〜る〜一〜つ〜れれ〜秋乃夕あ〜も〜心む〜く〜秋あつ〜く〜き〜れ〜山

廿秋

おま乃のねまこくうらぬ雲深の神は行き秋の夜すり
雲深れ神は色なきおあつらうらうらな海やと記るまきり

月

此のれあれおいぬ老ぬとて免くさうめやハ秋の夜此月
うれれおの表をぬま志あく海は此月をう海ををる
月をまむ筈の氷乃ぬまくも今とこそぬ秋乃夜をう
本乃一母今母うらぬ月をうら秋のわこれハ年にしこへ
ひひらぬ表しせと消してぬ心まむ秋すの月記
石田先生おますんえハ唯の一字此志免一あ
こと候うらとむわくくおひはくせり
唯くとあて唯も唯ちうらすくちにすせくうら城こうん
折しも水車此うらあや心ようらひなれと筆のほいてま

お車水からううれううらはははくと母あてうぬや志免
淀河とことおぬ水のお車おますせくおあしををあ
心まらうらとびうらなほをらう

時あつをぬわかともう海よりほきぬ詞此記ととまけ
うらと母記すあすわんうらうら此記乃何おいとと母
うらやすいむらうら兵衛の世此記うらをまにすせて
何をより何やうはせんちりうら此記うらを人おすうせて

西乃上人うき記ひハ物何あくもえてハうぬや
うらハあひをうらうらやまハ此記すうら
こころまをめ於中村何うハあかハこころ記は
求ゆく波上人乃うら記物あは弘川の弟あを
うらあまうらハと嬌ハ所にもあまう神うら
はこころうらとまをてうら記筆もあうらえす

誤るぬ人乃あつらふかうれはぬ思ふむうし北のく此のあと
波岸の申日草草居れなきなり西の海つろの入口を
なとらんやまき

和子をいふに乃くふの道直まわりり辰をくふ波のを方
平是雅翁なり三とくやれ秋乃夕れ草の元なるく
虫の喜も月此喜とやありー返一し

三つにぬ虫れ喜もけ此夕草も月も有る草此草を

秋歌此中よ

文物と籠の草松此月りらん城はまきしそきり
雨後の萩城さく

とふやまやるれ名萩乃夕草より秋うろ所ふ庭の萩をら
くへかの光や消人玉れ枝もるの各萩乃草のまきらきに
ろ海ひて萩わ城ともこむらふんふ海萩色しあせりや

音

さやに玉りそかさ細シなれや草れ施るのくも此系は物
臣備ぬ雲ともうらふちあめと輝草うろ秋わろくさの山
月

さもさや草と母ふ臣いつのるよめうろくう山のも乃月
うろり秋わろくさくぬをれかうしせら此そ月あつらるる
心地草うろぬ此葉月十四日月くまるうり草まきそ
およあむく所にあむるおあきの萩れ月此今宵といふのて
八月十五次

昔草わろりーせもけより今秋名な月月の草なり
乙女子あわろきふまむ月れれあさると今夜あまそ
かへく世の人乃心も清りる月とこりにやすくのあかん
今宵たよ心とともをすし鏡わら光の月此清るく

平是友依雅新を。あまきし。比。全。和。所。れ。う。ら。波。
ち。く。な。し。心。城。を。し。人。み。む。は。れ。と。ひ。り。比。あ。り。
し。を。ら。あ。れ。く。物。乃。何。や。め。も。わ。き。う。く。あ。れ。と。
今。宵。多。み。お。し。月。の。為。と。く。月。乃。葉。乃。三。枝。多。く。
お。れ。し。志。三。枝。山。の。後。う。す。く。こ。ち。う。く。
今。夜。把。と。え。る。今。も。あ。ひ。や。る。心。れ。り。や。え。に。ま。む。ん。
こ。ろ。の。あ。と。ひ。も。に。月。ん。し。人。の。あ。り。あ。り。を。
れ。し。と。青。あ。ひ。お。く。
諸。と。毎。に。去。る。月。を。あ。ひ。も。く。後。よ。り。も。秋。乃。中。き。
池。水。月。の。う。る。は。ん。く。
比。水。も。わ。き。く。と。青。を。院。に。り。月。乃。の。ぬ。彩。は。と。
十六。秋。
あ。き。や。山。端。お。し。月。乃。葉。乃。三。枝。多。く。を。れ。と。

石田先生能く公よあくる秋三首
不生不滅

不の火也常ちる物は打いて世乃とるちるもとるは
寐滅為楽
地乃花は誘ふおりの香施く色もも消る空のあつら
機法一体
秋の燈をみ草にむくふあちうやうくうは乃元は月影
虫の聲をひく
あはれもむもひくくの香きくく虫の香も元は草のく草
重陽
あはれに子世はつらわく老はくをく笑菊も心くく
あはれ乃ゆりをわく
あはれも笑菊の香も香に山分はあつらぬるとも

此山より登ると二多ひりふはあひぬきは叢菊両開
池日候とありし古とかなとありき

神妙なる老の海の家此處に少くもひ開くもふれ白菊
赤少く此山分衣るうぬまよ秋をさううひく白ふく

今より一は人よ云々ねく老う身もさきにのちる初うきこの山
小田より登りて

麻るうてち後志候る小田を所猪やいてく初るもうらん
ぬるてのお糸候ん

相うす初る山林赤きくく一處にぬるその色れてくらさ
九月十三夜大和ちるましとふささうま

今宵初光候すし此名もあすちとらりぬる長月の影
十八日人よさうらねく久米守ま林向の眞を

世に

お糸に酒わくめて不ううににくぬ此の叢花をうを

日夕暮ます田北此乃中よりありき

さひさ月すくこの池の中くみそともんぬ秋の夕暮
この園山より月の出る候ん

不のうらる光るえええとてこの山をりりる月影
十九日の秋志くまのーをれと

あひやる影れとせのりみちうり初色す人秋まの志く
廿日初瀬少く

限る所は半もをよハハ小初瀬や色ともあれ秋の山も
曇後乃夕を告る鐘の音もお紫よ白をいつせ乃や

表ハ花秋をね糸よこりえれ初瀬の山をさうまやハむ
廿一日龍門の滝をん

滝津波ささる布も也うく縁をうくふ秋末山始

此亦母むかし。日かずしる。法の抄りも。成るく
去る。母ふ所と。わら。り。山。海。と。随。つ。岩。本。乃。若。れ。む。り。五
廿二日。一。の。妙。く。その。う。す。し。控。し。跡。さ。く。ら。る。ぬ。ハ
芳。野。山。ま。ま。つ。る。席。を。詠。も。直。し。岩。の。う。を。乃。む。り。な。う。ら。よ

立健

為ても。決。る。そ。久。ね。位。控。し。ぬ。し。不。志。く。ぬ。草。れ。い。り。わ
日。一。山。妙。く。別。道。と。る。比
業。甚

返一

似雲

且。是。れ。が。君。分。衣。う。も。い。き。く。ね。禁。ま。ら。く。し。こ。し。の。奥

立健

ゆ。り。人。を。く。そ。す。く。ね。氣。も。や。く。ち。り。か。む。み。り。比。山

返一

似雲

ね。氣。も。や。く。地。に。は。も。古。野。山。ま。ま。し。て。い。と。む。人。乃。鉄。め
似。雲。上。人。紅。糸。の。比。初。歩。争。ら。り。の。ま。ま。り
新。ふ。く。奇。あ。す。く。え。ん。く。り。を。れ。性。範
芳。野。山。ま。ま。れ。り。み。ち。も。色。を。い。ぬ。鉄。を。り。ち。人。の。と。ま。ふ
う。魚。一

似雲

在。り。之。く。録。あ。や。ち。云。乃。も。也。よ。又。と。ふ。岩。り。比。野。山
似。雲。上。人。玄。年。こ。ま。乃。布。り。く。者。成。ら。め。む。と。ち
き。り。し。に。と。う。を。ね。禁。乃。比。訪。れ。て。居。か。く。立。いて。ハ。ヤ
竹。え。を。さ。さ。し

性範

契。り。を。記。し。う。れ。と。も。忘。れ。は。立。論。り。き。て。岩。り。比。野。山

返一

似雲

立。帰。る。福。や。る。う。む。む。に。初。者。り。を。み。り。の。山
夕。暮

旅之く里も也近き夕暮れ深山末ちぬその下道
昔秋多

浮るは秋の名残北色をへく登山娘や神女さすは良景
初冬雨 昔秋比より秋目くれさうりれ

いほくも流をさるめー坊めら志くくせ成所れあけいそ
木柵

散とえくくくむとの中くに見を小妻乃このめらら
霜

くえんれを成ちるちる松ふも秋のそ笑笑員さーの山
旅業不秋

胡邪も流くををを色くの木柵をちりく山乃庭路
六田境まく

一葉ふにのこさぬ風れ柳りらむつ乃流をををを

似雲上人よりくれなるとく 改名

かきけくを名残をけり弘川母を立陽る人のまくれ
近

弘川は立るうてもちかへにけりむ別を我も忘ま
吾村何うけ庭の池う水鳥の遊ふ成んく

淡うぬ人の恵いよをのつううも別くる庭れいけ
遇友思昔 七回忘勅進

く秋の柵う流を忘まめやま七世のまおれとも
非毎月十八日乃夜麻乃發成ま

春日燈や秋の子多ハ柵もく秋業ハ秋ささるの夢
十九日

秋柵み淡茅色ほくかり枕が菊山も面わりして
日秋まらる心比まらるるるるるるるるるるるる

ふやうに覚えをれり

玉れ緒れ施ちんとする心よを程うり返し南無阿弥陀仏

は時にもなひし人業は口よりわきれて志す

をと程くやんて業はとまきく虫縁侍りぬ

一正地母とひきるとと施やして又別とわかれ玉乃緒

知是雅原乃祥世はきれたうり

血を親ときえともあはれは候の程や妙と云れし

智清老尼追悼

消はゆもゆるれ人乃世もあま親者を思ふ心比し

見乃者なきこととひはゆを程

御くら笈の水乃るまにまきとれ南無阿弥陀仏

い弘川乃業居あきくまきとるふくたりぬはいろき

くうとろく残りし灰らとをば難波のくま

流止し初ねりす一母とるの石あり魚うり

いつれりもくむやも命位上人日忌日とく

極めを祀し也その執ハ活西鑑又思乃布と西光居

まく世のうと亡母五十四忌をうけしとみ向草

まく世のうとくうにまうりぬ

はわな所れり糸と志程し西の海をうりやん宗の明書

いをるまひちま所れほのわらぬ浪義の浦まうり捨た人

心乃て定のまきさうりねり所れは末はあしれ海とく

笈乃業の者初とるふると云佛とるうりやん母すはれ

心とや秋羊の笈乃業まきくきけを佛の法名はるふてい

いつこの玉さのといふ初めく

とる波は波もくけと破松さのくれしをそ沖は湖とせ

追悼 一もひもえさうりし人たうり所まうりぬとく人の

まきめりは

藤もよりかけてもあつぬ人あにけるときはけと神をあらはし

二十一代集にあらはし。か—戸のうらまゝとく
あつぬ人のんもわびつめてせせしる代く乃云此禁
寛阜亭にありひく

くやき—世すすれくう静うる心はてにをるの—乃菴
去年寛保二年十二月廿六日七十賀。

一兼院官賞二不法親王を。

御詠筆あつぬり—一幅ぬ海遊—乃原詠。

あつぬ海遊くもほのまき—はゆきあつぬの神也祈人

同大鳥居海再立り—とびは人竹を架く
あつぬいやきく—巖着面影—つばき鳥居を

寛天和尚八十八乃賀又寄松祝

年より八千世も経む松乃うま八—かさねる老乃乃末

早梅はるく

去らば色香をゆむ年内はほ—えむ宿老梅の—乃花

去月斎

去秋もくく心乃玉此緒を月のおつるは掛くあつる年

十二月廿五日曉—晝爰を感ゆ—くうく
天潢—又へくしてまら

松梅の色香もそひて神植はうらあつぬ—とやん

年内立春 十二月廿二日立去らるるをねと

也—もくくあつぬえより法此月ふくまて去八事より

采葉書

事志々々那の年此書ふにも山とるを—此を静那也

延享元 甲子年

元日

海山乃いつくもせしし乃とをくハ花乃初此初去乃せし
佛母公ハ十八よりせ給ふ此祝く

同早希宰相實積口母とくく過せし

半路ハ年の末此あり教を松乃葉毎ハ子世を替へん

實積口より返し

賢りをく松の云の葉幾子世乃あり教にくく定よりそへん
一葉院官佛會始

當有 孝 音

万代をわすぬ去日笑梅乃色多此をすくくい去の
曰佛和の老木此松たふれて極之を世給ふ由のまら

子日祝 湯和歌

去日誓や子年此中の子旧して去る代り生わすくく人
勅定所よりく一葉院官二不法親王道初海く和歌の
御点せしを給ふ湯事此祝よりくくを過てま
つる百壽唐之殿乃はくこうみり

末初海くわくくくや唐人も業する道の大和云乃葉
取つあま此此よりゆりある方よりせちりりりね

せせくをこあう返し

あし又より形このをいつくくを清くそ人乃命よりりれ
定をりつんるすく此く一此を

長閑しね去帆川舟の教えく海つくく世之末乃時本の
弘川寺西行堂へすくつる乃ハ橋掛よりくく和乃不

とりよ石をてくをまじえりてくく歌

踏由はなる事とこれと諸人の地うらやむる谷此岩と一
延享元甲子年二月十六日

弘川寺西河堂建立此堂内は字像をふくまひ
表釋教といふこと也

西河一に不き此堂にふくまひ字像をふくまひの崎と
此字像模の手紙さゆりし事一にまはせは

象ちる位を記乃きさうらに又面影の二寸を月杵と云
さいきやうたるれ世をいふみづかつつくりはまはりて

さけと又わらもふくまひの花れはみづくせうるうくひ
淨厨子れ施さるる事也

弘川やう一に世をさるるぬに一につる影はゆへ
壺茶のほくえ寄附せし志誠感一と其のたれ名

佛也花をいふ心はくえとそよめれし一とらりり
佛也花をいふ心はくえとそよめれし一とらりり

入佛入像乃徒普作法もあらりたり

入佛の徒普作法もあらぬ所はぬ一心は南無阿弥陀佛
也讀ゆりく人くむむひと今日糸詣の流中現

世安穩後生若し佛果菩提法界一佛性法界と
にもに南無阿弥陀佛くと十念号はなるなりと

諸人を見んこと八群集道依男女款在の教色皆
候く々々合掌禮拜正時自心めく自心を忘ひ

久せば念誦の所せしとわく人みなめられおま
る事かつとくおそゆとくうらりたり

いろ此山路城をちのわりとあらす茶屋より同國
一一く犯奇

ほめさしねとをて此所を志れとらぬ人々を合掌をて
と六つと徒普法は又まらりは清りく佛事

佛事

此を志こもをねたをあらうる此るう。丹誠をぬきん
出く

諸人の花なる法の場を清めく。晴まをりふれし。乾雨
さましく。これに祈り。また天も。衣と感念。ましく
り。あとも。う。く。は。く。く。む。く。佛神をねま。

弘川寺園位上人の像。法告の日。わ。ら。あ。海。く。
く。ま。し。く。世の厭離。く。く。と。び。ひ。つ。ま。く。

立健

山涼くのうねく。ま。この。れ。ひ。に。い。つ。心乃。つ。海。を。清。す。
け人弘川表。多。亭。に。く。海。髪。く。く。く。その
髪。み。款。を。く。く。乃。極。の。な。に。む。く。す。ま。く。く。に。に。
候。く。く。感。一。く。く。

あてまる。花。く。り。あ。く。く。髪。を。後。世。う。を。て。海。と。云。の。し

奉寄懐似雲老法師

奥州富山

雲美草

粒。燕。東。方。膚。寸。雲。一。朝。乃。作。滿。天。雲。其
心。又。向。嵐。山。去。身。世。百。年。誰。似。雲。

似雲

此を志れ。け。も。ぬ。く。海。の。う。く。あ。り。う。定。め。ぬ。そ。乃。浮。き。
二月。廿。九。日。の。う。く。を。る。に。表。多。亭。く。く。

和遥

山。ぬ。く。人。も。暮。せ。く。を。の。つ。く。席。の。名。ふ。お。り。く。の。表。多
諸。人。乃。候。の。あ。く。ぬ。く。つ。く。此。乃。の。花。又。海。の。下。を。
右。の。奇。を。き。く。く。く。く。く。似。雲

咲。花。の。色。香。び。を。く。く。く。く。く。く。く。く。人。れ。云。の。紫

風。の。心。ち。く。く。病。所。く。く。

紫蓮

く。く。く。く。老。木。れ。表。風。は。花。く。く。ぬ。身。も。地。く。く。く。く。人

う色

似雲

世に流く散る祀の花ちれや老木此極所もさうく
上田何なりし心のゆきとこりふうらちくか
ひし又の日のあきき人入うる負まてうさね
くりねあ流乃を流う流ちれとまつるは
くもは若らつれとうんをうこ

似雲

思ししてうされ向ふ心

卯月十七日の郭公の勢なき

心とまよそいれをく立侍の月小をくまぬ山時
こあまをり中村何の珠入をくうと
な末掛くまらほは川号北心のすはきま忘る那
葛城山 渡色代別業亭数景と
せのう花郭公月者もう流まうはわつた乃山

毎月十日入日れ名抄乃を流うあやう

らるも未定引接すちうぬるさいよく念佛
中つ外を好ま境乃着熱

何をす吹風は着さあくあふりそそよまの月
回しははは身中うり人びく

聲あそちうぬをうそそ蝶のらりの歎きも神ハ
むうし生葉をとりし所まをまは

何をかう我も無所のをすつうされたつ人ののみ向のこ
煉夕

秋よまくれかおれを流うきえとむらうさ色を
秋曉

老ぬまて秋の夕れ神より老木はうてあかりあつた
色昂是空く昂是色

去林より川ろひうる花お繋るもつるはちきも言ひは
述懐く舊四一首よ

今も多し心もや喜ぶ世の人にとてら情くも世をも掩り
神祇新教を一首よ

まかり神も佛もあふぬ安や下のすくくころるらん
禮拜乃おしりも

此にそひちりもそよふ胡夕れま向はるも親の面影
臨月のほろおちとほ比より出くえまは又月面を
ほく志ほしめる不もるふやすしこらふうをくも
てありしはもあつぬ色まらつてきりれといくも
きし人ぬえせられたうをたきき相まつゆしどめ
ゆりと人のしひをれしきくふとぬのこりるま名を
なく下のこくにくらぬまは不思議まといひつり

去まはと尋りしはあつたもこちき心なうく去実に
ほふり外のるゆしと情りひしをきくをに
やうとわらひしきし心よをむといひか
法お施とあ流ふまきかた世ま志ほめる也も消ちむ
やしをほく若れ友あうりり鏡城ももあぬ面影
くもまたこれ流の中鏡志ぬ翁の影見ぬ中
掛くえむ世の控しゆもし何の世の五換乃人かうふ
しゆしを心よきくぬとくわほの世まぬ鏡なりれ
えれれあうる心れあうるし何るう影もこわ
り返しあは行き若うか何うはゆまふれをくま
しゆわ乃世もあつて位所をまきなふまのこをえまつをて
ふ流志と補むうせまゆをなま世の時月もこのけりし
お毎小あまをな世世何のそんく位も控もまわうかりり

いづちも小暑をるはぐ此の海や舟浦舟の布ともなをちよ
十八日追悼

尋らるるをくそむれ和此浦や昔の人を名めを秋の事
十九秋月々の浦をりろくさ山をある月然るあやう
とせれいあめの浦船波風も今宵るくさにいづる月影
十五日泉別はくしこの世あく

叶多花の名よこく星の色も秋を子くさ此虫の影く
毎常 式人より追悼初を

鳴虫も草葉よと流る末の露本の末此世をや後らん
九月十三夜須磨れくろく

長月の影くそいねみちけよ光とるるにテのくは
十四日^夜月明るあく

波の音松の初きにいあし(とさひい)し此月を所にいむ

十五日翌中の清水を澄ひく

老う郎もりふお忘れく下南形よ子世のうをくむ松乃下あ
因夜ぬ石の月ふさひつこもる

やしや今宵二秋をすた鏡浦とあし此長月の影
十七日似せき美原ろく此山はあけひくさひくをさ

明石のくくみやうてけひりるこれいこのあまりよ
宗敷

誘ふ月もさたりあつこきやうりにさひ一層れらそ
返し

月然のこあつ明石此浦人を舟さるひる雲やいとこむ
回来はくろくろく難波よをそむむく舟踏ま

清舟乃あぬるあわあしうくをくし秋も月まをこれ
さるし一法浄三社又訪く心中よあ向なる和歌

松乃葉北らとも多に祈る事誠わかれ給へ位在乃神
正に此程終末下と世玉津湯とらるるうを祈るは波のもつも
明不深波の朝芳吹多く乃多之世よ秋乃うら風
廿七日 雜波あぐ

准大臣從一位藤原實隆公七回忌みちし世
給ふ佛進福しなるごとく

君が為何うなむ毎雜波にや所成つては清き云の葉
七とせ乃葉のよ命をむつのはさかるとかする三十二文字
並指人心見性成佛をうらの經も月をうら指の
あぐしはあぐを

さるむもさるる忘れくつる人の心乃月亦何うさるる人
行事如爰 梅江初知是一月忌初進
定ち此世も爰ちれや一とせれめくるよ乃神もあぐ

あぐさぬよ紅葉の色成よりくあつるのうら
さるるひしとく初の人れ多よりうをれと
い法と母色しえめや候うぬ心成候くえはるお葉く
十二月廿日秋 暢鼓亭下よさるし一以者次乃
月おりし候うるまき乃
除書ふと心云の葉を埋れくうあめさるる

照に月歌

